

『論語』の道德論(第二部)

高 橋 進

序

本論文の第一部(原富男博士古稀記念論文集『人間の研究』所収)においては、従来の、孔子および『論語』の、伝記的研究、原典批判的研究、注釈学的研究とは異って、『論語』そのものから読み取れる道德論的・倫理学的な論理の再構成による体系的叙述を目的として、これを論述した。そこでは、まず「孔子の人物と学問の態度」を論ずることによって、みずからの哲理に生きようとした孔子の人物を、主として学問へ向かう態度を中心に描き出した。続いて、孔子の内なる道德論としての「対自と対人の徳」をできるだけ詳細に論じ、孔子における言・行・忠・信・義・礼・和・楽の道德的意義を体系構成的視点において関連的に明らかにし、さらに、孔子における「仁の論理」を前項の徳論の解明の上に立って、全体的に論述した。しかしここまで論じてきて、なお、孔子の内なる全体、鬱結して通路を得ないでいるものの全容はまだ十分に明らかにすることはできなかった。その道德論的体系構成の点からいえば、孔子における天・道・性・命の思想は、それが明らかに孔子の語として残されているものが稀であるだけに、なおいっそう、われわれにそれを解明したい意欲をかき立たせる。また、孔子の理想とした政治思想や教育思想は、彼の学問論や道德論と切り離して論ずることはできないが、それもまだ解明できていない。

そこで、本稿では、右に残された課題を解明するために、その前提的・準備的作業の意味において、かの司馬遷がみずからの悲惨な境遇と共にはき出した言葉、「孔子における鬱結して通路を得ざるもの」を、彼の「孔子世家」を中心とし、他の歴史的資料によりながら、描き出し、第三部論考の継起としたい。

一、鬱結して通路を得ず——司馬遷と孔子

父太史談が憤死して三年、司馬遷は父業を継いで太史令となり、五年の間、史記（歴史的な記録）をはじめとして石室・金匱の中におさめてあった書物文献を引き出して閲読し、さらにこれらを整理し順序をつけて記述を始め、七年を経過したとき、彼の身の上に思いがけない事件が起こった。

いわゆる「李陵の禍」である。紀元前九九年、彼の友人でもあった、辺境の匈奴征伐の將軍李陵が、敵の大軍にとり囲まれて捕虜になり、家族もその責を負って死刑に処せられることになった。子遷（父の談に対してこういう）はその処刑を不当として李陵一家を弁護したため、武帝の怒りをもって自らも宮刑に処せられ、獄につながれた。

そもそも李陵は、名將李広の孫で、彼の悪戦苦闘したようすは、『漢書』卷四五・李陵伝にくわしく述べられているように、まさしく刀折れ矢尽きての降伏であった。子遷は、李陵が名將であり、その高潔なる人格と勇武とをよく知っていたから、降伏のゆえをもって李陵を罪し、かつその家族にまで累を及ぼすような処断のしかたにがまんがならなかった。彼にとつて、勇武の戦歴とその陥った苦境は、称賛と同情に価こそすれ、犯罪とすることは許せなかった*。

* ちなみに、『史記』卷一〇九・李將軍列伝第四十九には、「太史公曰く、伝に曰く、其の身正しければ、令せずして行なわれ、其の身正しからざれば、令すとも従わずと、それ李將軍の謂いか。余將軍を睹るに、俊俊（誠心にしてつつしみ深いこと）として鄙人の如く、口は道辭することあたわず。死するの日に及び、天下の知ると知らざると、皆ために哀を尽くせり。彼その忠実の心、誠に士大夫に信ぜられたるなり。諺に曰く、桃李言わざれども、下おのずから蹊を成すと。この言小なりと雖も、以て大に喩うべきなり。」とあって、子遷みずからが、李陵の人物を評論してこのように結んでいる。

なお、このすぐ前には、この時の遠征のようがくわしく書かれている。直接的には、天漢二年秋（前九九年）武帝將軍李広利が兵三万をひきいて匈奴の左賢王を祁連天山に撃ち、他方、李陵は兵五千をひきいて居延の北千余里に出で、もって匈奴の兵を分断して攻撃し、將軍李広利の軍營に敵をして攻撃せしめなかった。

しかし、その勝利は援軍を武帝が送らなかつたために長く続かず、単于という敵將の兵八万に李陵の軍は包囲され、ひきいる兵五千は、矢すでに尽き、その過半が戦死し、敵をも万余を殺傷した。連闘八日、居延をはなれること百余里の山谷において匈奴の軍にさえぎられ、李軍はついに退路を失った。李陵は「面目の陛下に報ずるなし」といって投降した。

その兵のうち漢に帰つたものわずかに四百余り。武帝は陵が兵と共に戦死することをねがったが単于が彼の勇將たることをたたえて、その女をめとらせ

た。武帝はこれを伝え聞いて激怒し、陵の母妻子を族誅した。これよりのち、李陵の名声は敗れ、彼の門下に居た者も、それを恥じたという。

しかし、その正義感が彼の身にもたらした結末は、実にあわれであった。その著、『史記』『太史公自序』には、「これ余の罪なるか。これ余の罪なるか。身毀られて用いられず……」と嘆いているのである。

さて、司馬遷は、このようにして宮刑に処せられながら『史記』の論述にはげんだのであるが、そもそも宮刑とは、当時の五刑のひとつで、生殖器を損壊する刑、つまり、男子ならば生殖器を切り取られ、その後多くは宦官として仕えるという、屈辱このうえもない極刑であって、とうてい正常な神経では堪えることができない。身を幽囚と屈辱のうちにおきながら、しかもなおかつ彼が修史事業にはげんだのは、旧友任安少卿（当時、益州の監察官）に送った返書に、「……すべて（史記）一三〇篇、私はこれによって、天地（一本は“人”に作る）の際をきわめ、古今の変に通じ、一家の言を成そうと欲したからであります。しかし、この修史事業が未だ成就しないうちに、たまたまこの禍に遭ってしまいました。（私がこのような屈辱に堪えて生きているのは）ただこの事業が完成しないことだけを惜しみ、その故にこそ、この極刑にも慍の色をみせないのです……」*と記されているところからも知られるように、ただ『史記』完成の一点にのみ生の燃焼を求めているにはかならない。

とはいえ、彼の心中は、いかに彼みずからが、これは自分の口から出た禍であるにせよ、それによって卿党に嘲笑と侮蔑をあびせられ、かつは父母の名をけがして、もはやその墓前に立つこともできず、百世を経てもなおその汚辱はいや増すばかりであると考えたとき、彼は

ここをもつて腸一日にして九回す。居れば則ち忽々として亡う所あるがごとく、出ずれば則ち往くところを知らず。この恥を念う毎に、汗いまだ嘗て背に発し、衣を濡さずんばあらず。身はただ閹閹の臣たり、寧んぞ自ら引きて深く巖穴に藏るることを得んや。故にまさに俗に従って浮沈し、時とともに俯仰して、もつてその狂惑に通ぜんとするなり。……

という。すなわち、「屈辱のあまり腸はにくりかえり、失意のあまり茫然としてわれを失ない、堪えがたさのためにいてもたってもいられないほどの苦悩におそわれ、このことを思うたびに憤懣の汗が背中からふき出して着物をぬらすほどであります。私は今や天子の後宮に近侍する奴僕（臣）でしかありません。どうしてそのような私が深く引きこもつて巖穴の中にかくれたりいたしましうや。それ故に、まさに世俗のおもむくところに従つて浮き沈みし、時にめぐり来る吉凶と共に高下してわが生を生きながらえ、もつて狂気と惑乱の間に往来しようとするのみであります。——というのである。***

*『漢書卷六二・司馬遷伝、および『文選』卷四一・報任少卿書一首、司馬子長。両書には、旧友任安が子遷に与えた書簡に対する返書が載せられている。引用文はその一部で、両書の文に多少の異同がある。ここでは『六臣註文選』卷四一所収のものを用いた。
*** 右に同じ。

ところで、司馬遷の父談が漢室に仕えた太史令という職は天官であって、直接、民政・兵事にたずさわることなく、天子に侍従し、いわゆる文・史・星曆に従事する卜祝（吉凶の占いと祭祀）のような役目であった。地位は丞相（天子を輔佐する宰相）の上であったが、太史令という官職は、政治のひのき舞台で行なわれるのではなく、宮廷内の裏方的存在であった。

しかし、たとえ地味な役割であっても、丞相の上に位置する職であってみれば、司馬家の家格はかなり上であるということが出来る。しかるに父談もまた、元封元年（前一〇年）のころ、天子が泰山におもむき、はじめて漢室の封禪（礼を行ない、天地を祭る儀式で国威宣揚にもかかる王室のもっとも大切な行事）を行なったとき、本来ならばその儀式一切をとりしきる名譽と責任を担うべきはずのところ、「周南に留滯して事にあずかるを得ず。」と「太史公自序」に録されたように、どういう事情か、この儀式にたずさわるができなかった。父談にとって、この重大な儀式をとりしきることは、太史令として一生に二度とない榮譽であるはずだった。それをはずされたことは、彼にとつて堪えがたい屈辱と憤懣であった。『史記』の「太史公自序」にはこの時の父談の悲哀といきどおりがつぶさに伝えられている。

故に憤^{いかにたり}を發してまさに卒^{しむ}せんとす。しかるに子遷たまたま使して反り、父に河洛の間に見ゆ。太史公、遷の手を執りて泣きて曰く、余の先是周室の太史なりき。上世嘗て功名を虞夏^{ぐか}に顕わししより、天官の事をつかさどる。後世中ごろ衰う。予に絶えんか。汝また太史とならば、則ち吾が祖に続^つげ。

とあるように、父談は、封禪にたずさわるができなかったのを直接の理由としてついに憤死するのである。しかるに、父の悲運を挽回し、父祖の遺志を継承すべき任務を負った子遷がまたまた同じく屈辱と怒りのうちに身をおかねばならなかったとは、まことに運命の皮肉といわざるを得ない。

本来ならば、先祖代々の、とくに父談の天官に就任して以来の家柄と名譽を思えば、子遷の受けた官刑という恥辱は、堪えがたいものであり、父と同じように、憤死自殺も止むなき心境であつたろう。それをしも思い止まった彼の心中には、修史事業のもつ明確な目的意識ないし自

覚があった。

このことについて、先の旧友任安に送った書簡文から明らかにしてみよう。

……ところで、生を貪り、死を惡み、父母を念い、妻子を顧るのは、人情の自然であります。しかし義理に心を激しく燃えたたせる者に至ってはまた別です。つまり誠にやむを得ざるころあるがためです。

今、私は不幸にしてつとに父母を失ない、兄弟のよるべくもなく、ただ独り身で孤立しています。そして少卿（任安）、このような境遇のなかで、また、私が妻子に対してどのように顧慮しているかわかりでしょう。（決して私はこれをとくに心にかけているわけではありません。）

勇者、必ずしも節に死せず、怯夫また、おのが本分の義を慕い、これが実現に勉めぬものがないと、どうしていえましょうか。たとえば私が怯懦（きようだ）していたずらに生を欲しているように見えなくても、おのが身の出処進退は十分に心得ているつもりでございます。どうしてみずから縲紲（ゑいせつ）（黒索をもつて罪人をつなぐこと。獄につながれること。）の恥辱に沈溺することがあり得ましょうか。しかも、かの賤しい奴婢ですらもあえて引責自決することができます。まして私が誠に（自殺も）やむを得ない状況において、どうしてそれを為し得ないことがありましょうか。

私が隠忍して不幸に堪え、生きながらえて糞土の中に身を置き、それをしも敢て辞さないのは、わが心中にどうしても尽くし得ないものがいまだ残っており、世を没して、文采（ここでは史記の完成した著作）の後世に表われないことを痛恨するからであります。

嘗ては富貴をほしいままにした人も、今やその名は磨滅して記録することができません。ただ、奇才非常の人のみが、後世にその名を称せられるに過ぎないのです。

思うに、西伯（文王）は姜里（ゆうり）に捕われて周易を演じ、孔子は陳・蔡の間に災厄に遇って春秋を作り、屈原は放逐せられて離騷を賦し、左丘は失明して国語を作り、孫子は脚を切られて兵法を修し、呂不韋は蜀に左遷されて後世に呂覽を伝え、韓非は秦に囚われて説難・孤憤（ぜいなん・こふん）著わしました。さらに、詩三百篇は、たいてい賢聖が心に発憤するころあつて作爲したものであります。

これらの人々は、皆その心に鬱結するころがあつて、しかも通路を得なかつたからでありましょう。それ故往事を述べて将来におのが

志を知る人の出づるを待ったのであります。

以上、れわれが子遷の生涯のうちで、もつとも悲惨であった「李陵の禍」を中心にみてきたのは、ほかでもない、子遷が右の文末に開陳している、古の賢聖の、「心に鬱結するところあつて、しかも通路を得ない」ものに着目していたからである。それはまた子遷自身が、わが身の境涯にひき移して深く同感するところでもあつた。

現実が自己にとって、何らの *Sorge* をも感じないものであれば、そのような人間はハイデガーもいう如くただの *das Man* (ひと) に過ぎない。しかし、現実の自己および自己のおかれている状況が欠如的であり、憂慮すべき事態であればあるほど、人はその欠如態に対置される完全さを求めるであろう。それを「理想」というならば、理想とは、つねに「期して待たれるもの」といつてよいであろう。

わが心のうちに鬱結して通路を得ないものが、期して後世将来の人の継承・理解に待たれるのであれば、それをいかにして伝えるかである。そこに文字言語の意義もまた生じてくる。文字言語は対話の言語と共に、人々の交通のための道具であり、手段である。しかし、後世将来に伝えるものは、道具としての言語ではなく、まさに、その言語のうちに含まれている通路を得なかつた先人の心である。

一般に論理学でいわれる「概念」は、何らかの意味で共通・普遍を志向するといつてよい。しかし、今ここで問題になる「言葉」は、概念的普遍を志向するよりは、むしろその個人の心のうちをもつとも個性的に写し出すものでなければならぬ。そしてしかも、その個性的な心のうち、の鬱結したもの、が、期して、後世己の志を知る者に理解され認証されることを待つのであつてみれば、もつとも個性的なものをもつとも普遍的なものでなければならぬことになる。つまり、個性的なるもののまさしく字義通りの徹底において、その個が普遍を証し示すことを、みずからにおいて期待するとき、鬱結して通路を得ないものが、はじめて「通路を得て、道となる」ことができるであろう。個が個に徹することによつて、却つて普遍を証し、普遍となることができるのである。

子遷のあげた、文王、孔子、屈原、左丘明、孫子、呂不韋、韓非、および詩三百篇の各々の作者は、わが心の鬱結したるものを、文字言語に託し、もつて右のことを期待した。

では、子遷は、ある意味で自分と境遇を同じくし、七十余君に見えて遂にその志を得ることができなかった孔子、しかも、その学問への態度と人柄と人徳とに深く傾倒していた孔子に対して、彼の生涯事蹟のうちに、いかなる「鬱結して通路を得ざるもの」を見出ししていたのか。これ

について、子遷は『史記』『孔子世家』に、詳細に伝述している*。

いま、この「世家」を中心に、子遷がその伝述に当たって、もっとも基礎資料とした『論語』に徴し、さらに孔子制作にかかる『春秋』および三伝——「公羊伝」「穀梁伝」「左氏伝」——によって補欠しながら、孔子の生涯におけるとくに「鬱結して通路を得ざりしもの」に注目し、逐次的に叙述してみよう。

* 上米、本稿で『史記』を引用してきたが、テキストについていまだふれてないので、ここで言及しておく。『史記』の刊本は、後人が何回となく転写・改版をくり返してきており、また後世の注釈家が注を施すときに、自己の見解によって、本文すら改竄したらしい形跡があることからして、『史記』の伝述がすべて正しいとはされ得ない。ちなみに、武内義雄博士によると、唐以前に『史記』の注釈本と考えられるものが、およそ一五家一九種あったが、大部分は散佚し、現存するものは、裴駰の『史記集解』八〇巻、司馬貞の『史記索隱』三〇巻、張守節の『史記正義』三〇巻の三種類にすぎない。しかも、この三注は、北宋以前は別行本として伝えられ、その注釈が同じでないばかりでなく、典拠とした『史記』本文も異っていたようである。

南宋に至って、「三注合刻本」ができ、以後これが世に行なわれた。しかし、それによって、本来別行本としての固有のテキストは失なわれ、新たに「三注合刻」のテキストができた。(同氏『老子原始』第一章)

ここでは、右の「三注合刻本」を中心とし、さらに、滝川亀太郎氏の『史記会注考証』(東京大学東洋文化研究所蔵版)によることにした。

二、孔子斉に行く

魯の昭公二十五年^{*}(BC五一七)孔子年三十五の時、季平子と郈昭伯^{こうしょうはく}とが鬪鶏を行なった。このことに端を発して、昭公の怒りに触れ罪を得た季平子は、許しを請うたが容れられず、昭公の誅伏の師に対抗して兵を興した。季氏は、孟孫氏・叔孫氏と共に、魯国の政治を左右掌握する三大勢力(いわゆる三桓氏)のなかでも、最も強大であったので、利害を同じくする他二家の加勢を得て、昭公の軍と闘い、これを破った。昭公は難を逃れて斉に奔った。

孔子は昭公のあとを慕って斉に行き、斉の大夫高昭子の家臣となり、斉の景公に意を通じようとした。^{**}

* 昭公二十五年は、『春秋左伝』昭公二十五年の条にも、「公伐季氏、不克、奔斉、魯乱」とあって、ほぼ信ずるに足る。

** 「孔子世家」のこの部分「孔子適斉、為高昭子家臣、欲以通於景公」、のうち、高昭子の家臣となって云云については、従来、孔子が斉大夫の高昭子の家臣となつてまで、景公に意を通ぜんとするのは恥である、梁玉繩の『史記志疑』にも「欲通齊景、不恥家臣、孔子而如是乎……」との見解がある。さらに、子遷は、「孔子三十歳の時、斉の景公と晏嬰とが、魯の近郊に獵をしたとき、魯国に行つて礼を問うた。」と伝述しており、また、孔子に景公が「むかし秦の穆

公は小国で辟地に位していた。それでも諸侯に覇たることができたのはなぜだろうか。」と問うたことをあげているが、もし、先に孔子が景公に会っているとすれば、後になって、何故に齊大夫の家臣となつてまで、景公に意を通ぜんとする必要があるのか、両記事は明らかに矛盾しているではないか……という意見を述べているのが、錢穆氏（『先秦諸子繫年』巻一・五「孔子適齊攷」）である。

しかし、ここでは、孔子が昭公のあとを追つて、齊に行き、景公に会見したことを認めて、論を進めることにする。

景公は、孔子に政を問うた。孔子は「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり。」と応えたので、景公はこれを嘉して、「善きかな。信にもし、君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらずれば、粟ありと雖も、吾豈得て諸を食わんや。」[＊]といった。他日、また政を孔子に問うたところ、孔子は「政は財を節するに在り。」と応えた。景公はよろこび、尼谿の田をもつて孔子を封じようとした。

ところが、景公の孔子を遇すること厚いのをみた晏嬰は、進み出て景公に次のようにいった。

そもそも儒者は多弁で、そのいうところの法に執^{したが}うわけにはいきません。また、傲慢不遜自任するところがあつて、これを下位に処しめることはできません。死者を弔う喪礼をいたずらに尊重し、悲哀の情を尽くして止むところなく、家産を破つてまでも葬儀を厚くするので、これをもつてわが国人の風俗とすることはできません。諸国を遊説して物乞いをしたり、借財をしたりするので、国政を執らせることはできません。

文・武・周公等の大賢人が絶えてからは、もはや周室は衰えるばかりで、礼楽もまた欠けて久しいものがあります。しかるに孔子は今どきになって、容飾を盛んにし、登降の礼、歩行の節を繁雑にしています。いつまでたつてもその学問を究め尽くすことができないばかりか、今さし当たつての礼すら十分に究めてはいません。

君がもしこのような人物を重用して、わが齊国の民俗を移し改めようとなさいますならば、それは民生の安定・救済をまず第一とする政治を行なう所以ではありません。

これが晏嬰の上言として子遷の伝述したところである。錢穆博士の『先秦諸子繫年』巻一の「附晏嬰卒年攷」の小論では、晏子没年を考攻しており、『史記』『左伝』『劉向の『説苑』等により、孔子が齊に適つたのは晏子の七十歳を過ぎた時期で、右の上言も信すべきものとしている。ここではひとまずこれを空言とする根拠を持たないので、この上言を取り上げておくことにする。

ところで、晏子の建言を聞いた景公は、その後孔子と会見したが、「不問其礼」と子遷がいうところからしてもわかるように、再び礼教を孔

子に問わなかった。他日、景公は孔子をひき止めて、「そなたを処遇するのに、季氏（魯の上卿で最も貴となす）ほどの禄俸をもってするわけにはいかない。季氏と孟氏（魯の国の下卿）の中間の禄で処遇したい。」といった。

またこの頃、齊の大夫が孔子を殺害しようとしたことがあった。孔子はこのことを聞いた。このような事情のなかで、遂に景公は、「吾老いたり。用うる能わざるなり。」^{***}といって、孔子を用いて齊国の政治にたずさわらせることを断念した。孔子は齊を去って魯に帰った。——これが『史記』に記述された「孔子適齊」の顛末である。

* 『論語』顔淵第十二にこの部分が一章として載せられている。

** 『論語』微子第十八にこれと同文あり。

もとより、ここで問題となるのは、右の晏嬰の景公に対する上言の内容、即ち孔子に対する誹謗である。滝川氏の『史記会注考証』巻四十七、孔子世家第十七のこの部分には次のような「考証」が付せられている。つまり晏氏は孔子の思想傾向や学問的態度と全く異った立場でものを言っているようだが、いくら人を非難するからといって、これほどまで相手となる人を非謗することがあろうか。また晏子の言をみると、たんに孔子平生の所言や事跡と異っているのみならず、晏子平生の言ともちがっているようだ——と。

事実、『左伝』昭公二十有六年の条にあらわれた晏嬰の所言や、『史記』の晏子列伝（巻二十六、管晏列伝第二）に伝述された子遷自身の晏嬰論をみると、「孔子世家」で景公に上言している晏子の思想傾向と異っているといっている。以下、次のようである。

例えば『左伝』昭公二十有六年、「齊有彗星」以下の文についてみると、次のようである。

齊に彗星が現われたので、齊侯がこれを禳^{はら}わせようとした。その時、晏子は、無駄なことです。ただのごまかしに過ぎません。天道を疑うことはできず、天命に弋^{そむ}くことはできないのです。どうしてこれを禳うことができましょう。しかも、天に彗星あるは、世の穢^{けがれ}を除こうとするからです。君に穢なければ、何をもって禳うことがありましようか。もし、徳の穢があるならば、たとえ禳ったとて何を除くことができましよう。

詩に^{*}

維^これ此^この文王、小心翼翼たり。

昭らかに上帝に事え、聿に多福を懷す。

厥の徳回ならず、以て方国を受く、

(ああこの文王、心つつしみ、

よく上天の道ふみ行ないて、多福おもう、

その徳健やかに、四方の国歸う)——拙訳

とあります。もし君の徳が道に違わなければ、四方の国もまた何で彗星の現われたことを患う必要がありましようや。

詩に、

我れ監る所なし、夏后と商と、

用ってこれを乱る、故に民卒に流亡す、

(遠き監は、夏の桀と殷の紂、

国は乱れて、民はさすらう)——拙訳

とあります。もし、君の徳が道に違い、国が乱れば、民は居処を失ってさまようでしょう。祝史のよくこれを補ける所ではありません。齊侯はこの上言を説んで禱を取り止めた。

* 『詩経』・大雅文王の「大明」の条に見ゆ。

** これは逸詩にて、現在本『毛詩』に見えず。

さらにまた、齊侯が晏子とその正寝(正式の堂室)に坐していたとき、公は歎息して「美しい居室だが、これは将来誰の所有に帰するのだろうか。」と問うた。これに対して晏嬰は、「それは如何なる意味でしょうか。」と問い返す。齊侯は「わたしが思うに、それは徳の問題なのだが」と。晏嬰はいう。

もし君のいわれる意味においてでしたら、この居室(即ち齊の政權をいう)はやがて陳氏(齊の大夫)のものとなりましよう。陳氏は大徳はありませんが、民にはよく施しています。豆・区・釜・鐘(すべて古のます目)で計量するとき、これを朝廷に取るときは薄くし、民に

施すときは厚くします。

君は厚く民から斂^{あつ}めているのに、陳氏は厚く民に施しますから、民はこれに帰順するのです。詩に*

徳の女^{なんじょ}と与^よにするなしと雖も、

式^{しき}って歌い、且つ舞わん、

(ならびたたえる徳なきも、

歌いて舞わん、いざともに)——拙訳

とあります。陳氏の厚い施しに、民は歌い且つ舞っております。将来、もしいさかでも君が政を惰れば、そして陳氏にして亡びることなれば、この国は陳氏のものでしょうか。

この上言に驚いた斉の景公は、いかにしてこれを防ぐための政を為すべきか、晏嬰に問うのであるが、その時の二つの応答の内容は、殆んど儒家的である。即ち、その一は、

ただ礼によつてのみ、これを止めることができます。礼においては、大夫の家の施しは国人にまで及ぶことができます。(国人は国君の治める所であるから、陳氏の家の施が国人に及ぶことは違礼である。)また、民は住居を遷さず、農工商賈もその営みを変えず、士人は職とする所を失わず、官人はその綱紀を慢りにせず、大夫は公利を私収せずということになっています。

という上言であるが、これを聞いた斉侯は、自分にはとてもできそうもない、自分は今にして礼によつて国が治まることを知った——と述懐する。晏子はさらに続けて、

礼をもつて国を治めることができるのは、古来久しく天地と並び行なわれてきました。君は令し、臣は共^つしみ、父は慈^{いっく}しみ、子は孝に、兄は愛し、弟は敬し、夫は和^なみ、妻は柔^{やま}しく、姑は慈^{いっく}しみ、婦は聴^{よめ}う、これが礼であります。

君は令して道に違わず、臣は共^つしんで式^{しき}かず、父は慈しんで教え、子は孝にして箴^{いさ}め、兄は愛して虔^{いっく}しみ、弟は敬して順^{したが}い、夫は和^なんで義^よくし、妻は柔^{やま}しくして心を正し、姑は慈しんで従^{きま}れ、婦は聴^{よめ}つて婉^{しとや}かにする、これが礼のすぐれた働きであります。

と上言した*

* 以上の『春秋左氏伝』のテキストは、杜氏注、唐孔穎達疏による『春秋左伝注疏』本を用いた。右の筆者の現代語訳では、この注と疏が参照されている。これを聞いた齊公は、自分は始めてこれを聞くことができた、と喜んだが、晏嬰は、「先王が天地に禀けたものを民というのだから、これを礼の上としたのです。」と応えて、この伝述を終っている。『左伝』に疏を施した孔穎達は、この条に対して、「先古聖王治理する所の人民は、陰陽の氣を受けて天地の中に生まれてもって上下の礼あり。乃ちその天下を治むべし。また、礼と天地と同じく貴し。ここをもつて先王これを上とす。」と述べている。

以上の例からしても、晏嬰の思想は、まず第一に為政者の修徳を求め、礼によって人倫を綱紀し、それを為政の中核理念とすることを伝承の「詩」の精神にその拠りどころを求めながら、明らかに示している。

さらに、子遷自身の伝述した晏嬰の人物論をみてみよう。『史記』卷六十二・管晏列伝第二による)

まず、子遷は、晏平仲嬰は萊(山東省)の夷維の人で、齊の靈・莊・景の三公に事えたことを述べ、次いでその人物を、①節儉力行をもつて齊に重んぜられた、②齊の相として人臣の位階を極めて、食べる肉は一種類であった、③その妾は帛を着ることがなく、④朝廷においては、君が下問すれば、これに言葉を尽くして応え、下問がなければ、自らの言行を慎んだ、⑤国の為政が人の道にならなければ、天命(ここでは時勢・時機をいうか)に順って行動し、道が行なわれていなければ、天命の赴く所を慎重に推しはかる、⑥故に、三公三代にわたって晏嬰の名は諸侯に称せられた、——と述べている。以下は晏子の言行事跡が特筆される。

そして、この列伝の末尾には、「晏子は莊公が齊の大夫崔杼という者に弑された時、その屍に伏して、これに哭礼して去った。これはいわゆる「義を見て為ざる、勇なき者」であろうか。また、君に諫言説教してその怒りに触れるのも意に介さなかった晏子は、いわゆる「進んでは忠を尽くそうと思ひ、退いては過ちを補おうと思う」ものであつたらうか。

いずれにせよ、もし今、晏子が生きているならば、自分はその御者になって仕えても、まだ慕う心が残るのである。と、このように記述されている。

以上のようにみれば、「世家」に描かれているところの晏嬰の孔子および孔子教学に対する批判的言辞は、晏嬰自身の思想傾向に照らし、必ずしも納得され得る妥当性をもたないに思われる。『論語』全篇を通してみられる孔子の思想・日常的言動態度、なかならず、彼の礼

に対する思想は、晏嬰の礼による人倫の綱紀とそれを為政の中核理念となそうとする思想傾向に比べて、決して異質的のものと思われない。それ故に、かの滝川氏の所説の如き疑問が生ずるのである。

しかし、従来の先人の研究経過（詳細は略す）からしても、孔子が斉に行ったこと、および晏嬰が当時、斉において政教の指導的地位に在って活動していたことは信すべき事実のようであるから、右の晏嬰の言辭は必ずしも空虚なものではない。これを前提にして考えてみると、晏嬰が孔子を沮んだ根拠には、やはりその思想的傾向と政教方針とにおいて微妙なくいちがいがあったとみるべきであると思われる。

即ち、その第一は、晏嬰は斉国前期の政教指導者管仲の方針ないし衣鉢を継いだ人物だったということである。管仲は『史記』管晏列伝（これは子遷が取材したところの『管氏書』に参照し、さらに子遷みずからいうように、管仲の主として逸事を記述した伝記である）にあるように、鮑叔（ほうしゆく）という心友にひきあげられて、斉の宰相にまでなり、政治・教育を指導した人物である。

その管仲は「列伝」によると、桓公を補けて相となり、桓公をして王に至らしめず、覇を為さしめた。彼は、「区々の斉をもつて海濱に在りて、貨を通じ、財を積み、……」といわれるように、富国強兵策を推進し、「倉粟実ちて礼節を知り、衣食足りて榮辱を知る。上、服度すれば六親固く、四維（しき）（礼義廉恥）張らずんば国乃ち滅亡す。令を下すこと流れの原（みなもと）の如し。民の心に順わしむ。故に論卑（ひく）くして行ない易し。俗の欲する所はよつてこれを予え、俗の否む所はよつてこれを去る。其の政を為すや、善く禍に因つて福となし、敗を転じて功となす。軽重を貴び、權衡を慎しむ。」と子遷が伝述したように、実利と事功を重んじ、學問によつて得られたものを、できる限り日常化し実践化することによつて政教上の空論を避けようとい意図した人物であつた。一種の功利主義的政治論というべきであらうか。

晏嬰は、いわばこのような思想傾向および斉の政教事情のなかで育つてきた政治家であつたのだから（管仲死してのち、百余年にして晏子あり、——と、子遷は「管晏列伝」にいう）この管仲という人物を孔子がどうみていたか——というのは、孔—晏關係を知る上で重要な手がかかるのである。事実、『論語』のなかには、管仲についての章がいくつかみられる。それらをあげてみよう。

子曰く、管仲の器は小なるかな。或るひと曰く、管仲は儉なるか。曰く、管氏に三帰あり、官事は摂せず、焉んぞ儉なるを得ん。

然らば管仲は礼を知るか。曰く、邦君は樹（い）して門を塞（ふさ）う。管氏もまた樹して門を塞う。邦君、兩君の好（た）みを為すに反坫（はんてん）あり。管氏もまた反坫あり。管氏にして礼を知らば、孰（た）か礼を知らざらん。（八佾第三）

これは、管仲に対していたく批判的である。孔子は管仲の器量を小だときめつけた。そこである人が、では管仲は節儉の人か、と問うた。孔子はいう、「管氏には三か所もの帰る家があったし、その家臣は数事を兼ねて執務するのが通例であるが、管氏はそれをしなかった。どうしてこれを節儉家といえようか。」と。それでは管仲は礼を知った人か、との問いに、孔子は「諸侯は屏を門の内側に立てて目かくしにするが、その大夫である管氏もた、それをしている。また、諸侯が両者たがい修好を結ぶとき、堂上の二本の柱の間で向かい合って盃を献酬し、飲み終ったらその盃を伏せておく台を「反玷」というのだが、これは諸侯の行なう礼であるにもかかわらず、管氏もまたこの反玷を用いている。このような人物である管仲のことを礼をわきまえた人だというならば、世間に礼を知らないものはいまい。」と応えた。

さらにまた、憲問第十四には、

子路曰く、桓公、公子糾を殺し、召忽これに死す。管仲は死せず。曰く未だ仁ならざるか。

子曰く、桓公、諸侯を九合するに、兵車をもってせざるは、管仲の力なり。その仁に如かん、その仁に如かん。

子貢曰く、管仲は仁者に非るか。桓公、公子糾を殺すとき、死する能わず。またこれを相く。

子曰く、管仲は桓公を相けて諸侯に覇たらしめ、一たびは天下を匡す。民、今に到るまで、その賜を受く。管仲微かりせば、吾らはそれ髪を被り枉を左にせん。豈匹夫匹婦の諒を為し、自ら溝瀆に經つて、これを知る莫きが若くならんや。

この二章がみえている*。

* 同じく、この憲問篇には、「或ひと子産を問う。子曰く、惠人なり。子西を問う。曰く、彼か、彼か。管仲を問う。（この）人や、伯氏の駢邑三百を奪う。疏食を飯いて齒を没するまで、怨言なし。」とある。孔子は、子産（鄭の大夫。法家をもって目さる）を惠人（いつくしみ深い人）といい、子西（鄭の大夫であらう）を、「ああ、あの人物か」と取りあわず卑しんでいる。一方、斉の大夫伯氏が罪を犯して食邑三百を没収され、それを管仲が与えられた——という事情があったにもかかわらず、自分の罪を認め、粗食を食いながら、生涯うらみことをいわなかったのは、人を心服せしめる力量が管仲にあったからだと評価している。後の二章と同じ趣旨の評価だとみてよいであらう。

子路・子貢とも、同じ事件について孔子に尋ねているので、その事情を説明しておこう。これより先、斉の襄公（僖公の嫡子）は無道の君であつたので、公子小白（僖公の庶子）は莒に逃れ、鮑叔牙がこれに従った。やがて、僖公の母方の叔父である夷仲子の子であつた公孫無知なる者が僖公を殺したので、公子小白の庶兄の公子糾も齊から魯の国に逃げた。このときこれに従ったのが、管仲と召忽だった。

ら、諸侯の礼を僭したという点であろう。いうまでもなく、礼は孔子教学の最大の眼目であつてみれば、大夫にしかかる僭越は人倫をみだるものであるといわなければならぬ。まして『論語』の構成が、前半を上論として最も古い部分、下論としての後半には後世伝えられて新しい附加部分がある——との見解をとれば、孔子の管仲評は、むしろここに掲げた三つの章のうち、最初のが最も信頼すべきものになる。そして、この一章においてこそ、いみじくも孔子教学との相違が明らかにされている。

即ち、管仲の「倉廩^{くら}実ちて礼節を知る」というテーゼは、孔子のいわゆる「疏食^{そく}を飯^くい、水を飲み、肱^{ひじ}を曲げてこれを枕とするも、樂しみまたその中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於ては浮雲の如し。」（述而第七）というテーゼと、著しく対照的である。

このような管仲の流れを汲んで登場した晏嬰だからこそ、先に掲げたような^{*}、孔子に対する批評（「孔子世家」による）ができたのであり、実質的に孔子の政教理念が、斉に広く行なわれるのを沮んだのであろう。晏嬰の斉の景公に上言した言葉が虚言でなければ、我々はこの間の事情をかく解せざるを得ないであろう。

* 先に掲げた「孔子世家」における晏嬰の上言を想起してみよう。「……君これを用いてもつて斉の俗を移さんと欲すとも、細民を先にする所以には非ざらん。」との言葉は、明らかに孔子の礼教思想が、すでに衰えて時勢に合わなくなつてしまつた周室の礼樂を振起しようとして、いたずらに、形式ばかりを重んじており、時勢に合つた実質的のものでないといふことに対応する非難である。晏嬰が斉の景公を相けて行なおうとした政教は、斉という、力によつて諸侯に君臨している一国の政治教育であつて、亡国ないし衰頹の国の遺風を再現することを内容としてはいなかったのである。

まして、この時、魯の昭公は、戦いに敗れて斉に逃れて来ており、それを追うかたちで、孔子が斉におもむいていたのであるから、景公が孔子を重用しようとしたのに対して、ブレーキをかける立場に立たざるを得なかったのが晏嬰であつたとみるべきであらう。

ただ、かくの如くにして排斥された孔子が、管仲の人物とその功績に対して一定の評価を下し、さらに、当の相手であつた晏嬰に対しても、必ずしも否定的な評価をしていないことが『論語』にみえているのである。即ち、「子曰く、晏平仲、善く人と交わる。久しくして人これを敬す。」（公治長第五）とあつて、晏平仲は人との交わりが長く深いほど、相手はいよいよこれを尊敬するような人物だとしている。

しかし、管仲に対する人物論においても触れておいたが、孔子は最もよくできた君子人を「仁者」だとしていたのだから、日常の事功に処する能力や人望をもつて直ちに「仁者」というわけではなかつた。それは、弟子たちに対する評価をみてもいえることである。即ち、

「孟武伯問う、子路は仁なりや。子曰く、知らず。また問う、子曰く、由や、千乗の国、その賦を治めしむべし。その仁を知らず。求や如何。子曰く、求や、千室の邑、百乗の家、これが宰たらしむべし。その仁を知らず。赤や如何。子曰く、赤や、束帯して朝に立ち、賓客と言わしむべし。その仁を知らず。」

とあるのをみてもわかるように、通常の人物評を超えて、つまりその処世上や政治上の能力を超えて、その人物が「仁」ゝ「仁者」であるかどうか——ということに究極の人物評価の視点としている。従つて、晏嬰や管仲を褒めているからといって、彼らが真に「君子人としての仁者」であることは、孔子にと

つては別であつたとみるべきであらう。

さらに第二は、すでに明らかにしたところであるが、晏嬰は、莊公が齊の大夫崔杼さいしよなる者に弑殺されたとき（『史記』『晋世家』第九参照）、その屍に伏して哭礼を行ない、しかる後に去つた——と「孔子世家」には記述されている。子遷はこれに対して「豈所謂義を見て為ざる、勇なき者ならんや。」という。これは現代語訳したとき、「どうして、いわゆる……勇なき者であらうか——いやそうではない」となるであらう。そうすると、子遷は崔杼討伐に従わなかつた晏嬰を肯定的にみていることになる。

ところが、孔子自身は、はるか晩年であつたが、このような事態をその思想上からも黙視できない人であり、またそのような正義心をもつた人であつた。即ち、魯の哀公の十四年、孔子の死ぬ二年前に、齊の大夫陳成子なる者が齊君簡公を弑殺するという事件が起きた。孔子はこれを聞いて、齋戒沐浴して魯の朝廷に趣き、哀公に対して「請う、これを伐たん。」と上言している。齊は自国ではないが、孔子の壮年時一度は行つたことのある隣国であるから、義憤に燃えた孔子は沐浴してまで陳恒討伐の兵を興すべきだと上言したのである。しかし、哀公は憂柔不斷で「夫の三子に告げよ」といつて逃げた。三子とは、魯国の政權を牛耳つていた三桓——孟孫・叔孫・季孫の三家——である。

孔子は、自分は大夫の末席に身を列ねている者として、これを看過できない、敢て告げざるを得ない、しかるに君はその判断を逃げて「夫の三子に告げよ」とは何事であるか——と慨歎しながら退出した。そして三桓子に告げたのであるが、もとより彼らはこれを聴き容れなかつた。明日はわが身の三子が、孔子の申出に乗るはずがない。再び、「吾、大夫の後に従しりようをもつて、敢て告げずんばあらず。」と嘆息してひきさがざるを得なかつた*。

* 陳成子、簡公を弑せり。孔子、沐浴して朝し、哀公に告げて曰く、陳恒その君を弑せり。請う、これを討たん。公曰く、夫の三子に告げよ。孔子曰く、吾、大夫の後に従うをもつて、敢て告げずんばあらず、君は曰う、夫の三子者に告げよと。

三子に之きて告ぐ。可かず。孔子曰く、吾、大夫の後に従うをもつて敢て告げずんばあざるなり。（憲問第十四）

これは孔子晩年の出来事であるが、はじめて齊に行つた（三十六歳）頃の孔子にはすでに周室封建制への復帰を究極の目的とする政教理念が基本的に成立していたとみてよいから、晏嬰がとつた、単に「哭して去る」というような態度は許せなかつたはずである。

少くとも、晏嬰からみた場合、当時の、大夫が侯を凌ぎ、侯が王を凌ぐような覇者の道が支配的であつた時勢においては、孔子のような下が

上を弑殺することに対して、それほど、人倫の綱紀を乱る非人間的なものとは感覚されなかったのではなからうか。

政權の推移、権力の消長、地位の更迭、上下の入れ替り、等々はすべて「時の勢い」であり「時の運」である——とする考え方がその基底に明確に自覚されていたのが、覇者への道を歩む当時の士人の支配的傾向だったのである。

しかしながら、王者の礼と覇者の礼、王者の政教と覇者の政教と、その具体的な施策において類似はみられても、その根本の思想ないし立脚点においては全く異質のものであったのである。

霸道の一定の完成者としての晏嬰が孔子に遇ったのは七十歳を過ぎてからであろうといわれる。それからみれば三十代の若輩孔子は、いわゆる「いたずらに礼の形式を追ひ、いまは挽回すべくもない周室の政治体制を思慕し、諸国をさすらい歩くもらい乞食」のような人物にみえたのであろう。晏子が治国・治民に益なしと拒斥した所以もここにあるといえる。

三、孔子魯に帰る——魯国乱る

「孔子世家」に「孔子遂に行つて魯に反る」とあるように、孔子は斉の景公に用いられずして再び魯にもどることになった。

これより先、孔子が斉に何年間留っていたかについては「孔子世家」に明らかでなく、そのため一年説と七年説とがある。ここでは、江永の『郷党図考』における一年説と、これに賛同した狄子奇の論（『孔子編年』巻二）、および錢穆博士の一年説（『先秦諸子繫年』巻一六）をとって、孔子在斉を一年位の短期間としておく。もっとも、一年か七年かは、本項を論ずる主旨からすれば、その内容にかかわる重要事ではないので、詳論を避けることにしよう。

さて、「世家」によれば、孔子が魯に帰った前後、年四十一（『公羊伝』『穀梁伝』は孔子の生年を襄公二十一年にしているから、子遷の二十二年におくのと異なり、一歳多くなる）のとき、魯の昭公は乾侯に卒し、定公が立った。紀元前五〇九年のことである。昭公が三桓氏に攻められて斉に逃れ、魯の政治的空位時代が始まって以来七年を経て、久しぶりに政權が魯公のもとに帰した。

いうまでもなく、この七年間の政權の空白時代を埋めていたのは、季平子（意如）を中心とする三桓氏の専權政治であった。ところが、定公の五年夏六月丙申、専横を極めた季平子が卒し、その子桓子があとを継いだとき、ひとつの事件がおきた。

即ち、『左伝』定公五年の条によると、この年六月、季平子が東野（季氏の食邑）を見てまわり、いまだ都に帰着しないうちに、房で卒した。このとき、季氏の家臣、陽虎が、魯国の君主が用いていた瑯瑤（らんぎょう）という宝玉を棺に納れて葬ろうとしたところ、季桓子の寵臣、仲梁懷なる者が、拒んでこれを与えなかった。

この宝玉は、昭公が斉に出奔したのち、季平子が魯君の政事を摂行し、宗廟にはいつてこの玉を佩びていたので、これを知っていた陽虎が、納棺の時に用いようとしたのである。

しかし、さすがに、専権をほしいままにしていた季平子でも、魯君の佩びていた玉をその死に臨んで棺に納れることは許せない——というのが家臣仲梁懷であった。仲は陽虎に向かって、「歩を改め、玉を改めん。」といった。元来、宗廟・朝廷その他の場所において、君臣は、その歩を異にし、臣は君に後れてこれに従って歩を進めるのが礼であり、また、佩びる玉も、公侯は「山玄の玉」、大夫は「水蒼の玉」、というように君と臣によって異っていた。今、仲梁懷は、すでに昭公出奔して薨じたあと、定公が立ったのであるから、季氏は「臣位に復す」るのが妥当ではないか、という考え方をしている。（この部分孔穎達『左伝』『疏』を参照）

自分の思い通りにならない陽虎は、仲梁懷を逐い出そうとし、季子の家臣、公山不狃（こうざんぶたう）にこれを告げた。しかし、不狃の「彼は君の為にするなり、何んぞ怨まん。」との言葉にこれを押し止められた。

このことをきっかけにして、季氏の家臣団は、陽虎派とこれに反対する季桓子派に分かれ、紛争がもちあがり、他国との外交関係もからんで、大いに季氏は乱れた。

そして、遂に、陽虎は季桓子と従父兄弟の公父文伯（こうはぶんはく）とを囚え、仲梁懷を逐い出し、さらに冬十月には、季氏の一族の公何藐（こうかぼう）を殺し、桓子と稷門（もくもん）（魯国の南城門）の内側で、公父文伯等を国外に追放することを盟約させた。

季桓子はこれを実行することではじめて許されたが、「孔子世家」にも「……陽虎はこれに由りて益々季氏を軽んず……」と記されているように、いまや季氏一族は完全に陽虎に抑えつけられ、軽んぜられるに至った。陽虎は、それまで魯君に対して僭上してきた季氏にとって代って、魯国の政治を掌握するに至った。

子遷はこの間の事情を「季氏また公室に僭し、陪臣国政を執る。是をもって魯は大夫より以下、皆僭して正道より離れたり。」と述べている。

ところで、この定公五年の事件が起こったのは、孔子が四十七歳（『左伝』『穀梁伝』によれば四十八歳）の時である。この前後、即ち、孔子が魯国へ帰ってから、わけでも、昭公が夢じ、定公が立って以後、孔子は出仕していたのかどうか、という問題がある。

孔子が齊国に何年間留っていたか、という問題については、すでに触れたように、一年説と七年説（昭公が夢じ、定公が立った時までの間）とがあつて、今はこれを確定することはできない。

そこで、ここでも錢穆氏（『先秦諸子繫年』巻一）や滝川氏（『史記会註考証』『孔子世家』）が従来の諸説にかんがえて一年説を支持していることを、そのまま取り、孔子の齊国滞在をおよそ一年としておこう。この場合、ここで問題になるのは、「孔子遂行、反乎魯」という「世家」の伝述に関連して、孔子はただちに魯に帰ったのか、あるいは、景公のもとを辞してさらに他国にしばらく滞在していたのか、という点である。

錢穆氏は、先の著書の、巻一・六「孔子自齊返魯攷」において、狄子奇の『孔子編年』や、江永の『郷党図攷』などにおける一年説をとりあげ、結局、彼自身一年説を支持しながら次のように述べている。即ち、

然考之世家云『齊大夫欲害孔子、景公曰、吾老矣、弗能用也、孔子遂行、反乎魯』、則孔子之去齊、並不以定公立而欲歸魯也、亦不見去齊後有暫棲他国之事、且其時孔子未仕於魯、亦不必定公立而後可歸、崔氏之說、純出推想、未足信、今既他無可考、姑依江氏說、とある。

ここで右の文を引用して、敢て問題にしたいのは、錢穆氏は、定公が立ってから、孔子が魯に帰ったという証拠も、他国にしばらく棲んだという事実もないばかりか、「且其時孔子未仕於魯、……」と述べて、「その時はまだ孔子が魯に帰って仕えていない」と、きわめて断定的に決めている点である。

かくして、これから考えられることは、以下の諸点についてである。(1)孔子は齊国に留ることおよそ一年にして四十二歳（または四十三歳）魯に帰ったが仕えなかった。

(2)その、仕えなかった期間は、我々の場合、齊滞在一年説をとっているから、およそ昭公二十七年に始まり（昭公が出奔したのは昭公の二十五年、このとき、孔子も昭公を追って齊に外遊したとされている）、「世家」の述べるところに従って、定公の九年、孔子五十一歳（あるいは五

十二歳)のころに至る、およそ十年間と考えられる。——これが第一の考えかたである。

その理由は、「世家」に、「定公の九年、陽虎は勝たずして斉に奔れり。この時孔子は年五十なり。……その後、定公は孔子をもって中都の宰と為す。一年にして四方皆これに則る。中都の宰より司空と為り、司空より大司空と為る。定公の十年春、斉と平ぐ。……」とあるように、孔子は定公の九年、五十一歳の時に、魯公に仕えたことになっているからである。

* 子遷は、定公の九年をもって、「孔子の歳五十」としているが、これは誤りであろう。何となれば、すでに触れておいたように、魯の昭公が薨じたのは、「孔子年四十二」の時としているから、これに加算した五十歳は「定公八年」とならざるを得ない。然るに、子遷は、「定公九年」をもって、孔子が魯の司空、大司空等の役職に就いた——としているから、孔子はこの時「年五十一」でなければならぬ。狄子奇(『孔子編年』卷二)は、「公山不緡が孔子を召した」という「世家」述べるところに関連して、「世家雖繫之九年、然云、此時孔子年五十、仍指八年言、」と、簡単に「定公八年」に孔子の「年五十」を合わせている。ここでは、「世家」にいう、「孔子年四十二、魯の昭公は乾侯に卒す」を、他の『左伝』等によつてたしかなものとし、定公九年を孔子年五十一の時とする。

(3) ところが、ここに、今述べた見方に疑問をさしはさむ余地のある問題がある。つまり、孔子は魯に帰ってから、定公九年までおよそ十年間、全く仕えなかったのではなく、この間に仕えたことはなかったか、あるいは、仕えないまでも魯の政治に関係しなかったか、——という問題である。

これについては、従来の研究においても明確にされていない。もっとも、孔子が斉に滞在すること七年であつて、定公が立ったころか、あるいはそれよりもさらに遅れて魯に帰ったとするならば、これはあまり問題にならないが、本稿では、滞斉一年説に立っているから、十年間、孔子は魯の政治に全く関係していなかったのか——という疑問が生ずるのである。

というのは、すでに引用した「世家」の文に、「孔子年四十二、魯の昭公は乾侯に卒し、定公立つ。定公立ちし五年、夏、季平子卒し、桓子嗣ぎて立つ。」とあつたが、子遷は、この文に継いで、あらまし次のような話を伝述している。

季桓子が井を穿ったとき、土製の小口の瓶を得た。その中に羊のようなものがあつたので、桓子は仲尼を召して問うた。「狗を手に入れた。」と、仲尼はこれに応えて、「丘の聞るところによれば、それは羊でありましょう。木石(山をいう)の怪物は夔(一足の怪動物)・罔閭(山の精にして好んで人の声をまねて人を迷わすもの)、水の怪物は鼃(神獸)・罔象(人を食う怪獸)、土の怪物は墳羊(雌雄の未だ分れない怪物)

だと聞いておりますから。」と。^{*}

^{*} 子遷のこの文は、『国語』巻五・魯語下第五に見える。即ち、そこには「季桓子穿井、獲如土缶、其中有羊焉、使問之仲尼曰、吾穿井而獲狗、何也、対曰、以丘之所聞羊也、丘聞之、木石之怪、曰夔魍魎、水之怪、曰竜罔象、土之怪、曰墳羊、」とある。滝川氏は、子遷はこの文を引用したものである。〔史記会註〕考証卷四十七・孔子世家第十七の本文の考証において

このあと、「呉は越を伐ち、会稽を墮^おちて骨を得たり。節は車を専^みす。呉は使いをして仲尼に問わしむ。……」とある。呉が越を伐ったのは、定公の卒したあと、哀公元年のことである。

この部分は、これまでの『史記』の記述がおよそ時を追って記録されているのに対して挿入されたもののように思われる。たとえばそれは、子遷が孔子の年齢を入れながら記述してきた傾向、即ち、「孔子、周より魯に反る、……魯の昭公の二十年には、孔子蓋し年三十なり、……孔子年三十五にして、季平子は……孔子遂に行つて魯に反る、……孔子年四十二のとき、魯の昭公は乾侯に卒し、……定公立つ、定公立ちて五年、夏に季平子卒し、桓子嗣ぎて立つ、……」等々の歴史的 내용의 叙述傾向をみてもわかるであろう。

さらに、右の、「桓子嗣ぎて立つ」——としたあと、ただちに「季桓子井を穿ちて……」と続けているのであるから、ここまでは、ほぼ時間的経過を追つて孔子の事蹟を伝述していると考えられる。しかるに突然これに続いて、呉が越を伐ったという、だいたい——およそ十五年もあとの事を挿入したのは、異様である。しかも、孔子は、『論語』に「子、怪・力・乱・神を語らず」（述而第七）と記録されているように、むしろ子遷の伝述した如き諸々の怪・力を否定し、口にはのぼらせようとしなかった人物である。

こういう点から考えてみると、『国語』から採つた子遷のこの文それ自体が必ずしも孔子の事実を伝えていることになる。

しかし、問題は、孔子が『論語』の記録に反して、怪・力・乱・神を語つたと伝えていることではない。かなり正確に時間的経過を追つて孔子を描いている、その文脈の中で、しかも桓子が季平子のあとを継いだそのすぐ次に右の「季桓子井を穿ちて……」の文を記録していて、その続き具合が一応納得できる説得性をもっている点と、もうひとつは、孔子が仲尼といわれて、季桓子と問答をとり交している点である。

孔子が季桓子と問答を交したというが、もしも孔子が魯国に臣事していなければ、時の権勢並びなき人物との間にこのような事が起こり得ただろうか。また、孔子は、昭公出奔のあとを追つて齊に行つたという。これが事実であるならば、全くの民間在野の人間がいかに自国の君主が

他國へ出奔したからといって、そのあとを追うようなかたちで出国することがあり得るだろうか。

さらにこれを、「世家」の初めの部分、孔子出生から説き起こされているところからたどって考察してみると、次のようなことがいえる。

即ち、そもそも、孔子の父、叔梁紇は少くとも二回武功をたてた（『左伝』襄公十年および同十七年に記録あり）軍人・武将であった。世襲的な貴族ではなかったが、武人として魯國に重用されるまでになっていた人物である。

孔子が生まれて父は間もなく死亡するが、武将の子である孔子が、いかに「吾少くして賤し、故に鄙事に多能なり。」（『論語』子罕第九）といったにしても、彼が全くの在野の農夫の子弟などでなかったことはたしかである。子遷が、「孔子、児たるとき嬉戯するに、常に俎豆を陳ね、礼容を設く。」と伝えているのも、この間の事情を裏付けている。

また、「世家」には、「この歳、季武子卒し、平子代つて立つ。孔子は貧にして且つ賤し。長ずるに及んで、嘗て季氏の吏となり、料量平らかなり。嘗て司職の吏となり、畜蕃息す。これに由りて司空となる。已にして魯を去り、齊に斥けられ、宋・衛に逐われ、陳蔡の間に困しむ。ここに於て魯に反る。……」*とある。

「この歳」というのは、魯の昭公七年、前五三五年、孔子十七歳の頃のこと。「長ずるに及んで季氏の吏となり」とあるが、これには異論があり、委吏の誤りだとする説が有力である。即ち、孔子は何で季子の家臣になどなることがあろうか、それは委吏の間違いで、倉庫係の役人だったのだという。これによれば、孔子は青年期に下級役人として魯國に仕えていたことになる。（もしも「季氏の吏」だったとしても、私臣・家臣として政治に関係していたことになる）さらに、「嘗て司職の吏となる」と記されているが、これも下級の牛馬牧養の官である。

注目すべきは、右に続く文で「……これに由りて司空となる、……」と記されている点である。司空となったのは、「世家」のずっとあとの部分に再述されており、それは定公の九年、五十一歳に当たるところにかけられている。いったい、孔子は、季氏の吏または委吏となり、さらに司職の吏となり、ひき続いて司空にまで昇進していったのだろうか。

これについて十分に明確にすることはできないが、「これに由りて」という表現は、前の「司職の吏となる」を受けた語法であるから、いかにも引き続いて昇進していったように思われる。一步ゆずって、「これに由りて」が、「嘗て司職の吏となり、畜蕃息す。」を直接受けていないとしても、錢穆氏（前掲書・既出）や貝塚氏（岩波新書版『孔子』第五章および年表）などがいわれるように、孔子が定公九年まで出仕してい

なかった——と断定するのは誤りであるように思われる。

以上、種々の観点から考察してきて、我々は、孔子が定公の九年にはじめて魯国の政治に関与したのではなく、青年期以後、武將の子として高位ではないが、魯国に出仕しており、また何らかの形で、魯の君主や季氏などを中心とする政路の要人と、政治的なかわりをもっていたであらう——という見解をもつに至るのである。

* 先に引用した「世家」の文中「……これに由りて司空となる。已にして魯を去り、斉に斥けられ、宋衛に逐われ、陳蔡の間に困しめられ、ここに於て魯に反る。……」の「已にして魯を去り」以下は、「世家」の後の部分にクロノジカルに伝述されているので問題はない。

この見解をさらに裏づけるために、「世家」の次の文を検討してみよう。

すでに掲げた「……季氏また公室に僭し、陪臣国政を執る。是をもつて、魯は大夫より以下、皆僭して正道より離る。」までの文章は、直接には、季平子が定公の五年に東野に卒し、その葬儀に当たり、陽虎が思い通りにできなかった当の相手、仲梁懷の仕末にからむ出来事を通じて、陽虎が季氏をしのぐ勢力を得て独裁的に魯の政權を専らにしたくたりに描写伝述したものである。

つまり、陽虎の專權が甚しくなつて、いよいよ魯国は政治の正道を失つたので、子遷は、右の文に続いて「故に孔子は仕えず、退いて詩書礼樂を修む。」と述べたのである。

この短い一文は、従来の研究者の等しく検討しなかったところであるが、語法的にも、その意味からしても、第一に、この「故に」は、「桓子の嬖臣を仲梁懷という。陽虎と隙あり。陽虎は懷を逐わんと欲す。……是をもつて魯は大夫より以下、皆僭して正道より離る。」までの意味内容を受けて用いられたものといえる。そして第二に、この「故に」を受けて、「退いて」と用いることによって、孔子が「退い」たのは、明らかに、季氏という勢力家の家臣団の内紛と陽虎の專横とによって、魯国が政治的に正道を失つたことを直接的な理由とする——ことを示している。

そして第三に、「退く」という以上、何から退いたのか、問題になるが、これは明らかにその前の「仕えず」を受けて、政治の場から退いたことを意味しなければならない。

以上のように「世家」の伝述するところを検討してみると、孔子は、斉に行き、再び魯に帰ってから、あるいはそれ以前から、定公の九年ま

で、そのすべてでないにしても、一定期間何らかの^いかた^いちで、魯の政治なり、政路の要人なりに関係をもっていた——といってさしつかえないのではなからうか。

このように解してきて、はじめて「是をもって魯は大夫より以下、皆僭して正道より離る。」という叙述も、写実的な力をもってくるように思われる。

もはや、周室封建制の恢復と、礼による政教体制の確立を、魯国に期待できる場は失われたと判断したからこそ、孔子は、一切の政治的關係から離れて、「詩書礼楽を修」め、子弟の教育に専念することになったのである。子遷が右に続いて、「弟子^{いよいよ衆}弥衆く、遠方より至り、業を受けざるなし。」と述べている所以である。

ところで、上來この項で述べたことは、「孔子世家」を中心として、孔子が斉に行った前後から、定公九年頃まで、魯国の政治にかかわっていたかどうか、という点と、また、陽虎の専横を契機として、魯の政道が紊乱に陥ったのを直接の理由に、孔子が（子遷の伝述によれば）魯国の政治とのかかわりを断って、自らの修学と子弟の教育に専心するに至った事情である。

子遷いうところの鬱結して通路を得ざるものは、この時においてまた、孔子に切実であった。

四、魯国政教の紊乱と孔子の理想とのずれ

以下においては、『論語』その他に拠りながら、当時の魯国政教の紊乱を内在的に描いてみよう。

いったい、孔子の生まれた春秋末期、魯の国には、いわゆる三桓氏と称せられる、孟孫、叔孫、季孫の三氏の勢力がきわめて強大であった。

これらはみな魯国に仕える大夫であり、天子（周王朝）からみれば陪臣であつたにもかかわらず、魯国の王族から出た身分であることも加わり、魯国の政權を殆んど手中におさめていた。

なかでも、季氏の勢力は最も強大で、三桓氏の族長的性格をもつのみならず、事実上魯国の政治を独裁する力をもっていた。独裁者およびその周辺が実力も地位もその名とともに保持できている間は、それなりに比較的安定した政權が確立されるのだが、ここで注目すべきは、魯の昭公の晩年頃から、季氏を中心とする三桓氏という氏族集団の内部や、その周辺、および従来まったく無力化されていた魯国の君主および公族の

側から、三桓氏のような権勢家を打倒しようとする動きが出てきたことである。これは、たんに魯国にあらわれた傾向のみでなく、中原の諸侯国にしばしばみられた現象であった。

貝塚氏によれば（岩波新書『孔子』）、諸国の侯位継承の紛争は、春秋初期にもあったが、初期と中期との内乱の間にははっきりとした相違があった。初期の内乱は、まず強力な独裁権をもっていた君主を、自家で占有しようとする貴族間の党派争いであった。中期の内乱は、大臣宰相を世襲する貴族によって、次第にその実権を奪われ、政治的に無力化した君主たちが、この貴族群にたいして、最後の反撃を試みようとして、ついにこれに失敗したあげく招いた悲劇であった。そして、諸侯国の君主たちにかかる動きをなさしめたのは、政治権力を握り、勢力を得ていた貴族たちに仕える新興の士の階級であった。彼らは知識人や武士で、諸君主はこれを起用して貴族勢力に対抗し、独裁政権をくつがえそうとしたのであった。——これが、春秋中期以降の中原の様相であると貝塚氏はいう。

すでに触れたように、昭公二十五年（前五一一）は、魯君が季氏を伐とうとして失敗し、斉に逃れ、以後、魯国に空位時代を生ぜしめた年である。この時の事情などは、右に述べた春秋中期以後の社会・政治情勢のひとつの典型といえるであろう。『左伝』昭公二十五年秋の条にはおよそ次のような事情が述べられている。

はじめ季公鳥（季公亥の兄で、季平子の腹ちがいの叔父）が、斉の鮑文子から妻を迎え甲を生んだ。やがて公鳥が死ぬと、季公亥（公若のこ）と公思展とが、公鳥の臣の申夜姑と共にその家の面倒をみていた。

ところが、死んだ公鳥の妻、季姒が養人（料理人）の檀という者と通じてしまった。季姒は淫事が公亥らにばれるのを恐れて、侍女に自分を打たせて傷をつけ、亡夫季公鳥の妹に当たる秦遄（魯の大夫）の妻にみせた。

「季公若（夫の弟）がわたしにいけないことをしたので、さからうと、わたしを打ったのです。」と。

さらに季平子の弟の季公甫のところへ行つて訴えた。

「展と夜姑とが、わたしに無礼なことをしたので。」と。

季姒の義理の妹、秦姬（遄の妻）が、この話を季平子の弟の公之に告げ、公子は同じく平子の弟である公甫と共にこれを兄の平子に話した。

季平子は公思展を下に閉じ込め、夜姑を捕えて殺そうとした。亡くなった季公鳥の弟である季公亥（公若）は泣いて悲しみ、「夜姑を殺すの

は、わたしを殺すも同じだ。」と命乞いをしたが、季平子は遂に夜姑を設人に殺させてしまった。

公若は平子を大いに怨んだ。

第二の話は、先に触れた鬪鶏にからむもめごとである。

季平子は隣に住む邱氏と鬪鶏をやったが、その時、平子は自分の鶏にカラシをぬっておいたので、邱氏は鉄をツメにかぶせた。これを見た平子は怒って、邱氏との経界を超えて家の建て増しをやった上、さらに邱氏の方が先に経界を犯していたと責めた。それ故、邱昭伯も季平子の横暴を怨んだ。

次いで臧昭伯の従弟の会が、不都合をしでかして臧氏に讒られたので、季氏の家に逃げ込んだ。臧氏では隙を伺って会を捕えたので、平子は腹を立て、臧氏の家老を拘禁してしまった。季氏と臧氏の仲も険悪になった。

さらに、昭公が前君の襄公を祭る舞の催をした時、衰えた魯の宮廷では格式通りの舞樂を廟前で奉納することができず、たった二人でしか舞わなかった。しかるに季氏の家では、家廟の祭に、八佾の舞（佾は列で、一列八人の八列で計六十四人）といって、正式に宮廷で行なう舞樂を奉納した。

いかに権勢並ぶ者なき季氏だとて、宮廷の行なう舞樂を私家で行なったということは、大変な僭越である。そこで臧孫は、

「先君の廟では祭の礼も行なうことができないとは、このことをいうのであらう。」

と季氏の礼を無視した専横を皮肉った。かくして、また魯の大夫たちも漸く季平子を怨むようになった。いまや魯国の政界において、父祖三代にわたる功業を背景に、独裁的権勢をほしきままにし、横暴を極める季平子に対して、周囲の士・大夫たちは結束して季平子を除こうとはかるようになった。

そのような動きは季氏一族の中からも起こった。即ち、平子の冷酷無残なやりくちに怨みを抱いていた季公若（公亥のこと。弟の公鳥の家臣を、ぬれ衣をさせられていたにもかかわらず平子が殺害した事件があった。）は、昭公の弟である公為に弓を献じ、かつ狩に連れ出して季平子追放の相談をもちかけたのである。

この謀議を聞いた臧孫は、それは困難だといって賛成しなかったが、邱孫は可としてこれを勧めた。昭公二十五年（前五一七年）九月、平子

に怨みを抱く郈氏らの士・大夫は、遂に昭公（および公の弟公為等）の統率のもと、季氏追討の兵を起こし、季氏の邸へ攻め込んだ。

不意をつかれた平子は、高台にのぼって許しを乞い、

「わが君は、わたくしの罪を察かにしないで、有司に命じて干戈をもってわたくしを討ち取ろうとしています。どうぞ願わくば、沂のほとりにわたくしを待たせておいて、罪をおしらべくださいます。」と。

もとより昭公もこれで許すことはなく、さらに、平子は費（季氏の食邑）に閉じこめてくださいといったが許されず、また馬五乗で国外に逃げたいと願ったが許されなかった。

もともとこの挙は、三桓氏のひとり叔孫氏の昭子（姪）が闕という所へ出かけているすぎをねらって為されたものだったが、この叔孫氏の家老が家臣団を集めて事情を話して如何にすべきかをかけた。家臣たちは「季氏を無みするは、これ叔孫氏を無みするものである。」と口々にいった。「ではこれを救おう。」ということになり、叔孫氏がまず兵を挙げたので、他の一族孟孫氏もこれに呼応した。魯公の軍は、この二氏の兵にひとたまりもなく敗れてしまった。

かくして、昭公の謀議は一朝にくずれ去り、昭公自身、政権を棄て、かろうじて斉に逃れた。未曾有の出来事が魯国を起ったのである。

さて、孔子はこの頃すでに壮年期を迎えており、「世家」によれば三十五歳の時であった。魯国政教の紊乱は、まさにその極に達していたといつてよいであろう。この頃の魯国、とくに季氏の専横は、孔子の目にも余すところなく写っていた。先に触れた季平子の私家の廟前において行なわれた八佾の舞の奉納の如きは、孔子をして怒りと嘆きに身をふるわしめる出来事であった。

『論語』八佾第三には、次のように録されている。即ち、

孔子、季氏を謂う。八佾もて庭に舞わしむ。これをしも忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからざらんや。

八佾という天使の行なう舞楽を季氏が奉納している。このような僭越をだまって見過せるといふならば、ほかのどんなことだつてしのび見過すことのできないものはないではないか——とうてい許すことのできない非礼である、と。おそらく『論語』全篇の中で、これほど、孔子が他を非難して怒りの口吻をぶちまけている記録はほかにないのではなからうか。

これに続いて、八佾第三には次のような章が録されている。

三家は雍^{きよう}をもつて徹す。子曰く、相^{あひ}くるは維^これ辟^{へい}公^{こう}、天子穆穆たりと。奚^{なん}ぞ三家の堂に取らん。

三家は、いうまでもなく魯の大夫、孟孫、叔孫、季孫の三氏。このいわゆる三桓氏は、天子の如く、雍（『詩経』、周頌の篇）をうたいながら先祖を祭るために使う供物をのせた台をとりのぞいている。これをみた孔子が、「詩に、助けるのは諸侯、天子はただじつと奥ゆかしく坐するのみと。どうして三家のみたまや（堂）などでこれをとりに行なうことができようか。」といったのである。そもそも、三桓氏は周王朝の封建した魯侯の家臣であつて、たんなる陪^{ばい}臣^{しん}に過ぎない。にもかかわらず、天子のみたまの祭りの時に用いられる雍をうたったのだから、僭^{けん}竊^{せつ}の非礼はここに極まっていたのである。

さらに、ある時、季氏が泰山に行つて、山祭りを行なつた。本来天子が天下の名山を祭り、諸侯が自国にある山を祭るのが常の礼とされていながらもかわらず、陪臣ないし家臣の地位でこの礼を行なつたのであるから、これはやはり僭越この上もないことである。そこで、孔子はこれについて次のように言つた。

季氏泰山に旅^{やまづり}す。子冉^{ぜんらん}有^うに謂^いつて曰く、女^{なんじ}救^{すく}うあたわざるか、と。對^{こた}えて曰く、あたわず。子曰く、嗚呼^{ああ}、曾^{そう}ち泰山は林放にも如^しかずと謂^いえるか。（八佾第三）

即ち、季氏に仕えていた門人の冉有に對して、孔子は「お前はこの季氏の非礼を正し救うことができなかったのか。」と言つた。冉有は「それはとてもできるものではありませんでした。」と応えたので、孔子は「ああ、いままで非礼は承けずといわれた泰山は、かの林放すらも礼の根本を問うたのに、これに及ばないと思つているのだからか。」と、かつは冉有を戒め、かつは季氏の諫止すべからざるを歎いた。

ちなみに、『論語』には、右の章に先だつて、林放が礼の根本を問うの条^{*}が見えている。『論語』の編者が意図的に林放問礼のことを先に提出し、その後、季氏の泰山における山祭りをあげたのかどうか不明であるが、先後の序はつけられていて、読者に右の章の意味を理解せしめるのに便宜を与えている。

* これについては「林放、礼の本を問う。子曰く、大なるかな問や。礼はその奢^せらんよりは、寧ろ儉^{けん}かなれ。喪はその易^{やす}らんよりは、寧ろ戚^{せき}め。」とあつて、礼・喪は形式や華美に陥るよりは、むしろ実直な、心のこもつたのがよいとしている。すでに述べた如き魯国の政教事情であつたからこそ、孔子も、林

放の問を「大なるかな問や」と褒めており、孔子の抱いている礼の根本を答えたのだとみるべきであろう。

同じような孔子の歎きは、次の章によっても知ることができる。即ち「八佾第三」の前掲章の直前には、

子曰く、夷狄にも君あり。諸夏の亡^なきが如くならず。

とあって、文化の行なわれていない（と当時いわれていた）東や北の辺鄙な国々にすらこれを治める君主があるという、本来あるべきわが中国の諸国にいま君主がないのとは大分ちがう——と、これを傷歎しているのである。これは疑いもなく、前述してきた魯国の無政府状態や周王朝の眼前の混乱と衰微を歎いたものであろう。

また、「八佾第三」に「禘」といって、魯国の先祖、つまり周室の祖を祀る大祭や、祭一般のことについて何度か孔子が言及しているのも、当時の魯国の状況のなかでなされたことに間違いはなからう。さらに、おそらくこの当時の魯国の政情を経験して発せられたであろう孔子の言葉が、『論語』季氏第十六にみえる。もっとも、これは下論に属する部分で、しかも、この篇は、すでに知られているように、とくにその文体ないし文字使用の上で、他と異っている部分が多く、上論よりも、さらに後から付加されたものとされてはいる。そのことを前提にしながら以下にこれを紹介しておこう。

孔子曰く、天下道あれば、礼楽征伐天子より出ず。天下道なければ、礼楽征伐諸侯より出ず。諸侯より出ずれば、蓋し十世にして失わざること希^{まれ}なり。大夫より出ずれば、五世にして失わざること希^{まれ}なり。陪臣国命を執れば、三世にして失わざること希^{まれ}なり。天下道あれば、政は大夫に在らず。天下道あれば、庶人議せず。

一世は三十年、十世、五世、三世は、けだし概数にして、数そのものを意味しないでよい。司馬遷が、「世家」において、すでに掲げたように「季氏また公室に僭し、陪臣国政を執る。是をもつて魯は、大夫より以下、皆僭して正道を離れたり。」といっているのは、まさに、右の状況に対する読み取りであつたろう。『論語』における「陪臣」も、子遷の用いた「陪臣」も、同じく諸侯の家臣の意味で、周王朝からすれば「また家来」ともいふべき性格の家臣である。それは、孔子によれば、大夫の僭権よりも甚しいもの、危険なものと思われていた。けだし、大夫は、王の直系の家臣で、王国の政治に直接たずさわる階級であつたのに対し、陪臣は、諸侯に仕える身分だからである。

ところで、孔子は、「天下道あれば……」「天下道なければ……」と区別し、天下に道が行なわれているときには、礼楽征伐が天子、即ち王よ

り発令してなされる、といったとされている。これは、右の章が、直接孔子の言葉の記録であるかどうかは疑わしいにしても、周知のように、孔子終生の悲願が、過ぎ去ってすでに形骸と化している周室封建制の恢復にあった点を想起すれば、首肯できるところである。

やがて、触れられるであろうが、孔子のある意味での悲劇性は、「礼楽征伐が天子から出される」ところに、「天下に道あり」とされる根拠があった点にみられる。王・公に始まる整然とした権力と治政系統をもつ体制は、すでに、孔子時代において、やがて郡県制へ展開する歴史的必然の渦中に巻き込まれ、音をたてて崩れ去ろうとしていた。

孔子のいわゆる「天下道なければ……」の方が、事の成り行きとしては、是非はともかく、当たり前の事であった。孔子は「天下道あれば、庶人議せず」といったとされているが、現実とは逆であった。庶人は季氏の専権をむしろ当然のこととした。昭公が放逐されて、外地で死んでも、だれもこれを罪として責めなかったのである。「天下道あれば、庶人議せず」どころか、天下に道なくして、しかも庶人の議は起こらなかった。

ちなみに、この間の事情が、『左伝』（卷五十三）昭公三十二年の条に語られている。

前五一〇年、昭公の三十二年、冬十二月、昭公は疾にかかり、やがて、己未、公は亡くなった。昭公が外地乾侯で死んだのは「其の所を失うを言う」べきであって、路寝（天子・諸侯の公式の堂室）に薨することができなかったからである。そこで、趙簡子（鞅）という者が史墨に尋ねた。「季氏はその君を放逐したのに、民はこれに服しており、諸侯もこれに与し、君が外地に死んでも、誰もこのことについての罪を責めない。なぜだろう。」と。

この間に対する史墨の応えは、まことに際立ってすっきりしている。以下にそれを通釈してみよう。

物が生ずると、兩つになるもの、三つになるもの、五つになるもの、陪式になるもの、がある。それ故、天には三辰（日・月・星）があり、地には五行があり、身体には左右があり、各々配耦するものがある。王には公が、諸侯には卿があつて、皆つきそうものがある。

天が季氏を生んで魯公に弑わしてから日すでに久しい。民がこれに服しているのも尤なことではないだろうか。魯君は、世々失政を重ね、これに反して季氏は、代々家臣としてその勤めを立派に果たして来た。民は魯君を忘れてしまったのだ。自国の君主が外地で死んでも、誰がこれを矜むものか。

そもそも、社稷を支えるに常の主君はなく、君臣の間にも常の位がないのは、古来からのことである。故に詩（『詩経』小雅）にいう。「高岸も谷となり、深谷も陵となる」と。

三后（周以前の虞・夏・商）の一族も、今はたんなる一国の君主となったり、あるいは庶人となってしまうのを知っているであろう。易の卦に、「雷が乾に乗るを大壮三三」とあるが、これまた、天の道なのである。

* この卦は「乾下震上」で大壮という。震が乾の上に在るから、雷が乾に乗る——というのである。孔穎達の『正義』では、「乾を天となし、剛となす。震を雷となし、動となす。天は剛をもって動じ、動すれば雷となる。壮の大なるもの。故に大壮という。」とある。また「天の道なり」について、杜預の注では、「乾を天子となし、震を諸侯となす。而して（乾）上に在りて、君臣位を易う。猶、臣の大きくして強壮なること、天上に雷あるが如し。」とあって、君臣がその位を易えて逆転することの意味するとしている。また、孔穎達の疏も、諸侯が強大となって、その威力が天子の上に在るのは、君と臣とがその位を易えたことに象るのであって、これが天の道である——と述べている。

昔、成季友は桓公の末子で、文姜のかわいがった子だった。懷妊した始めにうらなってみたら、卜人が「生まれながらにして聞えがよく、その名を友といわれて公室の輔佐となれることでしょう。」といったが、生まれたのちは卜人の言った通りになった。生後にその手を見ると文字があり、「友」と読めた。そこでこれをもって名とした。やがて成長して魯国に大功をたてたので、費という邑を受け、上卿となった。文子・武子の世に至るまで、代々そのつとめわざを増して、旧くからの功績を廃することがなかった。

魯の文公が薨じ、東門遂が嫡子を殺して庶子を立てた。魯君はかくして政權を失ない、実際の政治は季氏の手に移った。この君に至るまですでに四公である。

民が君主のことを知らないようで、どうして国を保てよう。このような次第であるから、国君たるものは、國權をあらわす器物と名とを慎しみ、みだりにそれらを他人に貸し与えてはならない。

以上が『左伝』録するところの、季氏と魯公の関係である。右文中、「魯君世從其失、季氏世脩其勤、民忘君矣、雖死於外、其誰矜之、」と言いい、さらに続いて、「社稷無常奉、君臣無常位、自古已然、」と言うに至って、まさにその言極まれの感がある。非情といえ非情ではあるが、民生の安定を第一とすれば、人民にとって、あるいは人民の日々の生活にとっては、治政の責任者が、正統的国君であろうが、それに臣事している大夫陪臣であろうが、そんなことはおかまいなしなのである。

季氏が八佾の舞を舞ったのを見て、孔子は傷歎し、且つ憤ったというが、一般庶人にとってそのようなことは、まさしく無関係だった——と言えるであろう。「帝力なんぞ我にあらんや。」である。庶民にとって必要な論議は、八佾を舞った季氏の是非を論ずることではなく、季氏または魯君に、国家権力を運用して、民生の安寧を招来し得る治徳があるか否かであった。

しかし反面、孔子をして言わしむれば、王またはそれに分任されて統治する諸侯、さらに卿・大夫等の君臣関係が乱れているようでは、民生の安定も、治徳の実現も不可能であった。国家権力の争奪ないし歪曲は、力の政治（やがて孟子のいわゆる霸道政治を招く）となり、民生第一を主眼にすることができなくなる。そこに、孔子の礼楽重視の思想が生じたのである。

子曰く、政を為すに徳をもつてすれば、譬え北辰その所に居て、衆星これに共うが如し。（為政第二）

子曰く、これを道くに政をもつてし、これを斉るに刑をもつてすれば、民免れて恥ずることなし。これを道くに徳をもつてし、これを斉るに礼をもつてすれば、恥ずることありて且つ格る。（為政第二）

これらの記録は、孔子がつねに為政の道を徳の実現に求め、徳治国家の建設を志向していたことを物語るものである。そして、その限りでは、つまり理想を徳治に求め、仁義礼楽の振興をはかって民生の安寧を得るという点において、孔子の意欲は妥当を得ていたのであった。しかし、現実の魯国を中心とする中原の政治的状況は、為政の当路者がすでに徳を失い、それ故に政治的抗争を惹起していたのである。徳治を要請することは妥当であるが、上に在る者に徳治なき時、臣事する者にのみ礼節を求めることは矛盾であろう。

「時勢とのずれ」は、孔子においては否定し得ぬところであった。これまさに子遷のいう「鬱結して通路を得ざる」ところを胸中に抱く孔子の姿であった。子遷が「故に孔子は仕えず。退いて詩書礼楽を修む。」（「孔子世家」）と記している文脈の中には、時弊を歎く孔子と、時勢に取り残されつつある孔子の映像が二面的に織り込まれていたと解すべきであろう。

なお、子遷は右に続いて「弟子弥々衆く、遠方より至り、業を受けざるは莫し。」と記しているが、この頃、弟子として入門した者がこのように多かったか否かを知る資料は現存しない。滝川氏は『史記会註考証』のこの文の下に、『論語』学而第一の冒頭にある「学んで時にこれを習う、……」「朋遠方より来たる有り、……」「人知らずして慍らず、……」等々の記録をもつて、子遷の言を考証的に裏付けているが、確実な根拠に基づいたものではない。

四、為政への執念

ところで、陽虎が季氏の専権を奪って、独裁政治を行なうようになって後、彼は季氏をはじめとする三桓氏の家長たちを殺戮して、いよいよその独裁体制を固めようと陰謀を企てた。

定公の八年、九月から十月にかけて起こった出来事である。『左伝』および『公羊伝』による)

季桓子の弟^{きづ}季廔、季氏の族^{こうしき}公鉏極、季氏の家臣^{こうしき}公山不狃らは、族長の季桓子に疎外されて不平を抱いていた。また、叔孫輒^{しゅくそん}(叔孫氏の庶子)は父の寵愛を受けておらず、叔仲志(叔孫の族)は魯国の朝廷に志を得ていなかった。

そこで、これら五人は陽虎に頼った。陽虎は三桓氏の各家長を追放し、季廔をもって季氏の長に、叔孫輒をもって叔孫氏の長に、自分は孟子にとって代ろうと企てた。

冬十月、陽虎らは、魯の先公を祀る順序を正してこれに祈り、さらに僖公(魯国の三代目)の廟で禘を行なった。陽虎は季桓子を蒲圃^はに招いてこれを殺そうと謀った。

陽虎は、都邑の兵車を集めて出撃の用意を命じ、壬辰の夜に季子を殺し、翌日(癸巳)集合した兵車をもって、季・叔二家を攻撃する計画を立てていた。孟氏の邑である成という町の長官である公歛処父は、陽虎一派の謀叛の企てを感じ、孟孫氏に急を知らせた。

公歛処父は遂行の前日(壬辰)に兵を集めて襲撃に備えた。いよいよ季子招待の日(壬辰)には、陽虎が季子の先駆となり、林楚が季桓子の車の御をつとめ、虞人(山沢農牧の地をつかさどる役人)が鉞^{つるぎ}と盾^{たて}とをもってその前後左右をはさみ、陽越(陽虎の弟)が殿^{しんがり}をつとめた。

いよいよ蒲圃へ向かおうとする途中、季桓子は、季氏の家臣である林楚に「お前の家は代々みな季氏の良き家臣だ。お前もこれを継いでくれるか。」と、説得を始めた。季桓子はすでに陽虎の謀叛を知っているから、林楚を何とかして味方になしようと説得したのである。

林楚は主命もだしがたく、季子の車を急に変えて孟氏邸へ着けた。孟氏では血氣の鬪人(馬を養牧している役人)三百人を集め、孟氏の子の一人である公朝の住む家を門外に建てるように見せかけていた。

季桓子の車が孟氏邸へ逃げ込むと、門を閉ざして内からしんがりをつとめていた陽越を射殺したのである。そこで、陽虎のひきいる軍と公斂

廋父が成からひきいて来た軍とが魯城の北門や南門で戦い、遂に陽虎の軍は破られた。

陽虎は、甲をぬいで公宮に行き、宝玉と大弓を奪い、車数十乗を従えて郊外の五父の辻（『公羊伝』では孟衢となっている）に宿泊し、やがて翌九年には国境を越えて斉国に亡命した。

以上のような事件が魯国に起こったのであるが、子遷はこれを、

定公の八年、公山不狃は意を季氏に得ず、陽虎に因りて乱を為し、三桓の適を廢して、更に其の庶孽（庶子）の陽虎に素より善き所の者を立てんと欲す。遂に季桓子を執う。桓子これを詐りて脱することを得たり。

定公の九年、陽虎は勝たず、斉に奔れり、この時、孔子は年五十なり。（『孔子世家』）

と記している。

ところで、この頃、孔子は魯国にいて、年齢は五十歳になっていた。子遷によると、公山不狃はこの頃、季子の邑である費という町にたてこもつて季氏にそむき、人をつかわして孔子を呼びよせようとしたというのである。これについては、従来問題があるので、まず、子遷の言うところから考えてみよう。子遷は、右に引用した文に続いて、

公山不狃は、費をもつて季氏に畔き、人をして孔子を召さしむ。孔子は、道に循うこと久しきに弥り、温温として試みる所なく、能く己を用うるものなし。曰く、蓋し周の文武は豊鎬より起りて王たり。今費は小なりと雖も、儼は庶幾からんかと。往かんと欲す。

子路説ばずして孔子を止む。孔子曰く、それ我を召く者は、豈徒らならんや。如し我を用うれば、それ東周を為さんかと。然して亦卒に行かざりき。

と記している。公山不狃が季氏（桓子）に対して不平を抱いていたことは、すでに『左伝』の定公八年の条を引いて明らかにしておいた。陽虎一味に加担して反季氏の運動を起こした人物が孔子を招いて、費の町の政治をやろうとした、というのである。この出典は、『論語』の「陽貨篇」とされている。それ以外にこれに類する資料はないからである。

公山弗擾、費をもつて畔く。子を召く。往かんと欲す。子路説ばずして曰く、これ末からんのみ。何ぞ必ずしも公山氏にこれ之かん。子曰く、夫れ我を召く者は、豈徒らならんや。如し我を用うる者あらば、吾それ東周を為さんか。（陽貨第十七）

これが『論語』の一章である。公山不狃と弗擾とのちがいはここでは殆んど問題にならない。従来の研究者の間には、孔子が『左伝』に記されている公山不狃の如き謀叛の人物の招請に応ずるわけがない。不狃と弗擾とは別人であろうとする説があった。しかし、『左伝』『論語』二資料以外になく、両者の内容が殆んど同じであるから、この両名は同一人物としてよいであろう。

次に最大の論点は、いうまでもなく、孔子が公山不狃の招きに応じて往こうとした——という事実があったのか、という事である。これには、否定説と肯定説とがあるが、まず趙翼らの否定説は、第一に、『左伝』の記事と一致していない——定公八年における公山不狃は季氏に叛意をもって陽虎を利用しようとした事実のみ、また定公十二年における彼は、費の軍隊をもって魯に攻め入り、孔子によって逆に撃退されている。第二に、だいたい、孔子は季氏に対して謀叛するような家臣の招きに応ずるような人物ではないということ。第三に、『論語』の下論十篇中、とくに「季氏」「陽貨」等の篇は、かなり後になってざん入されたきらいもあるので、この事実そのものを疑わざるを得ないというのである。

これに対して、肯定説は、(一)定公五年の秋九月、陽虎が季桓子を閉じ込めたときで、これは『左伝』(既出)に根拠をおいたもの。(二)定公八年とする説で、これも『左伝』(既出)に根拠をおき、秋九月、季寤ら五人が陽虎と組んで三桓氏の各長を追放しようとして失敗し、陽虎が譖陽関にはいつてそこで叛いたときとする。(三)は定公九年とする説で、これは子遷の記述した「孔子世家」の文(既出)に根拠をおき、陽虎が謀叛に破れて斉に奔ったときのこととする。

以上三説、それぞれ支持者があるが、今は確たる資料もなく定めがたい。(蟹江義丸『孔子研究』第一篇参照) 現存する資料は、『論語』の「陽貨篇」と『左伝』、それに第二次的な資料としての「孔子世家」のみである。ただ、肯定説・否定説と分けて、従来論じられてきているが、いずれの資料にも、孔子が明瞭に「出仕した」とは録されていない。

さらに、これに関連する資料として、「陽貨篇」の冒頭には、陽貨——これは『左伝』に記録されている陽虎とみて間違いはなからう——が孔子に会見しようとし、孔子と問答したことが残されている。そのあらすじは次の如きものである。

陽貨が孔子に会見を望んでいたが、孔子はこれを承知しなかった。そこで陽貨は孔子の不在のときに豚を贈って、仕方なく答礼に来ざるを得ないように仕組んだ。孔子も一計を案じて陽貨の不在を見込んで出かけ、答礼をしようとしたが、折悪しくその途中で彼に会ってしまった。陽

貨は孔子に邸に来て話しをしてほしいと要請する。陽貨はいう、「自ら立派な宝（徳）をいだいながら国を迷わすのは、仁と言えるだろうか。」と。孔子は「仁とは言えません」といってこれを否定する。さらに陽貨は「自分みずから政事にたずさわることを好み望みながら、いたずらに時期を失っているのは知と言えるだろうか。」と問う。これも孔子は否定せざるを得ない。陽貨は語を継いで「日月は過ぎ去って行く。歳もまたわれわれと共にあつてはくれない。」——お前も早く仕官すべきだ、と勧める。孔子はこれに対して「よろしい。わたしもひとつ仕官を考えてみましょう。」と応える。

孔子は陽貨の問いを肯定しながらも「吾まさに仕えんとす」といって、最終的にはその姿勢だけを示しているに過ぎない。したがって、ここでも孔子が出仕して陽貨（虎）のもとにはしったとは思われない。『左伝』にもこれに関する記録はない。

さらに「陽貨篇」には、^{ふし}仏肸という者が孔子を招いた記録がある。彼は晋国の大夫で、趙子の治める中牟^{ちゅうぼう}というまちの宰（長官）となっていた。彼はこの中牟に拠って謀叛を企て、孔子を招いたところ、孔子は承知してそこへ往こうとした。すると子路はこれに反対して「かつてわたしは先生から、自分自身で不善を為しているような者のところへは、君子たる者出かけて行かないものだ、と教えられました。いま、仏肸は中牟において謀叛していますのに、先生が往こうとされるのはなぜでしょうか。」と問うた。孔子はこれに対して「そうだ、たしかにそう言ったことがある。しかし、非常に堅いものは、いかにこれをこすっても、すり減ることはないし、真白いものはいかにこれを黒土で染めても黒くはならない——といわれているではないか。わたしは空中の枝の^一か所にぶらさがっていて食べられないふくべ（ひょうたん）ではない。」と応えて、積極的に出仕しようとする意気込みと自信をみせている。

しかし、この章の内容に関する『左伝』の記事（^一仏肸が中牟によって叛いたこと）は、魯の哀公二十年、孔子没後すでに数年を経たときのことである。

そうすると、先の公山不狃の謀叛と孔子招請との関係も、ここでの孔子と^一仏肸との関係も、必ずしも事実に即した記録ではないのではないかという疑問の方が強くなる。

しかも、すでに触れたように「季氏第十六」や「陽貨第十七」および「微子第十八」等は、『論語』現在本のうち、ここに至るまでの成書過程で、もっともおそく附加されたものではないか、といわれている。事実、これら兩篇をみると、その表現・体裁・内容等々にわたって、不自

然な箇所が多いように思われる。

たとえば、第一に「季氏第十六」の冒頭の一章の如きは『論語』全篇中もつとも長い文のひとつであり、この篇以降には、このような長文のものが多くなる。しかもその内容において、前十篇を中心としてみられるような、文字通りの「語録」(聞き書き) 的のものと異なり、いたく叙述的・説明的である。

第二に、これは従来いわれてきたことであるが、「季氏第十六」以降には、それまでの「子曰く」が消えて、「孔子曰く」という表現がとられているものが出てくる。また、「三友」「三楽」「三愆」「三戒」「三畏」等、三という数字による語句が出てくる。

第三に、「微子第十八」には、『左伝』にあらわれた孔子に関する歴史記述に符合する章がある。たとえば、三番目の斉の景公に孔子が会見したときのこと、四番目の斉人が季桓子に女樂を帰った話などはそれであって、いわゆる孔子の言行を孫弟子あたりが集録したものとしての『論語』全体の調子とはややはずれたものが見受けられる。

第四に、同じく「微子第十八」の「楚の狂接輿……」以下の数章では、孔子と当時の隠者や逸民との接触が描かれている。即ち、その一は、右の、楚の狂者(狂者をよそおって世を逃れている人物) 接輿が、歌をうたいながら孔子の門前をよぎっていった話である。「鳳(瑞鳥で孔子にたとえ、賢聖の治者があらわれると、それにつれて世に出るという) よ、鳳よ、お前の徳もなんと衰えたことか。過ぎ去ったことはいまさら諫めてみても仕方がないが、これから先のことはまだなんとかなる。やめなさい、やめなさい。こんなご時勢に政治にたずさわるなど危険なことよ。」とうたいながら通り過ぎていくのを聞いた孔子は、自分に対する風刺と受け取り、門を出て接輿なる人物と語ろうとしたが、彼は孔子を避けて走り去ってしまった——という。

またその二は、有名な長沮・桀溺という隠者が二人で並んで耕していたところへ孔子の一行が通りかかったときの問答である。孔子の一行が通りすがりに道を失ない、子路をして渡し場を聞かせたとき、この二人の隠者は車馬のくつわを執りおさえているのが孔子一行だとわかると、長沮は「孔子ならばわざわざ渡し場をわれわれに聞かなくても知っているはずよ。」といって孔子を皮肉る。仕方がないので子路は桀溺に問う。すると彼は子路が魯の孔丘の徒であることをたしかめたのち「とうとうとして水の流れるが如く、乱れに乱れているのが今の天下だ。それをつたい、だれがこの乱れた天下を治めて平らかにできることができようぞ。しかもお前さん、あの、仕える君主を選び好みして、気に入らなけ

れば避けてまわっている人物（孔子をさす）などについてあるくよりは、この世を棄てきってしまったわれわれのような人物に従って悠々自適の生活を送った方がよほどましではないか。」と、下を向いて耕やし続けていた。子路は為すすべもなく孔子のところへもどってきて、事の顛末を話した。孔子は憮然として、「鳥や獸とはいっしょに生活できない。わたしは、この人間の仲間と共に手をたずさえて行くのでなくして、いったいだれと共にやって行こうというのか。天下に道が行なわれていれば、わたしが先に立って、世の人々と共に時勢を変えようなどということをする必要はないではないか。」と語ったという話である。

その話の三は、やはり子路を仲立ちにした孔子と隠者との関係である。孔子一行が周遊の途次、子路が一行から遅れてついていった。そのとき老人が杖で篠（竹またはわらで作った土を運ぶ器）をかついでいるのに出会った。子路がこの老人に先生（孔子のこと）を見かけなかったかと問うた。老人は「手足を動かして働くこともせず、五穀の見分けもつかないような人物を、だれが先生などというのか。」といって、杖をたてて草をとっている。子路は、これはただの人物でない、隠者であろうと気づき、手を拱（こまぬ）いて敬意を表した。やがて老人は子路をいざない、家にとめて、にわとりを殺し、きび飯をたいて子路に食べさせ、かつ自分の二人の子供をもひき会わせた。

翌日、子路は孔子のところに行つてこのことを告げた。孔子は、それはきつと隠者にちがいないといって、再び子路をやつて見させたが、すでに老人はどこかへ去ってしまった。子路は言った。「仕えなければ、なるほど義理はないだろう。だが、長幼のけじめをやめるわけにいかないとすれば、どうして君臣間の義も廃することができよう。自分一個の身をいさぎよくすることのみを欲して、諸々のかかわり合いを絶ち、人のふみ行なうべき大道を乱してよいものだろうか。君子が仕えるときは、おのれにかかわる義を果たすためである。今、天下に道が行なわれていないことは、すでにこれを知っている。」と。道の行なわれないのを知りつつ、しかもそれなるが故にまた、止むに止まらず、こうして天下を周遊して道を説き道を行なおうとしているのだと、子路は孔子の心情を代弁している。

このような一連の孔子と隠者との対応関係は、『論語』においては、隠者の冷笑風刺に対して、たとえばかの長沮・桀溺に風刺されたとき、「鳥獸はともに群を同じくすべからず、吾、この人の徒とともにするに非ずして、誰とともにかせん。天下道あらば、丘ともに易（か）えず。」と応えているように、むしろ孔子およびその徒の積極作為を反批判的に提示している。

ところが、これが『莊子』などにおいては、孔子およびその徒は、隠者とか賢人によってこっぴどくやつつけられており、小手先の道德技術

は知っていても、真の大道を自覚・自得するに至っていない人物として描かれている。つまり、孔子と隠者との関係は、春秋から戦国にかけて展開した諸子思想を代表する二大潮流としての儒家的立場と老荘的立場との対応関係を象徴的に描き出しているのであって、上來あげたような記録は、必ずしも歴史的事実でなくてもよかったのである。

それはある意味で、歴史的経過の中に生み出された『論語』という書物が託されている歴史的状況の反映であるといってもよいであろう。前おきは長くなったが、以上述べてきたような事情を考慮しながら、もう一度問題になっている、孔子が陽貨（虎）や公山不狃の招きに応じて、謀叛的陪臣のもとに出仕したかどうか——を検討してみると、およそ次のようにいえるのではなからうか。

まず第一に、『左伝』に見える公山不狃の謀叛は定公十二年で、このときすでに孔子は台閭にあって、この叛乱を征伐する側に立っていたことになっているから符号せずという否定説に対して、公山不狃は魯国の陪臣であって、その謀叛を一々記録に留めたものではなからう、『左伝』に載っていないからといって、不狃の謀叛がそれ以前になかったとはいえない、との反論がある。これはしかし、そのようにいうことはできようが、積極的な反論ないし肯定説にはならない。

また第二に、公山不狃や陽虎のような謀叛人のもとに奔って出仕するのは、孔子という人物のイメージからしても、また、彼の『論語』等に記録された言動から推してもあり得べからざることだとの否定説に対して、それは孔子という人物を儒家の聖祖として絶対視する教条的な主張であって一笑に付すべきものと反論する。

この論争は、要するに孔子の人物解釈上の問題であり、また、孔子在世当時の歴史的状況をどう判断するか、という問題にかかわってくる。つまり、もはやこれは、あったところの歴史的事実およびその記述の真否を超えて、孔子の人物およびそれを取りまく歴史状況の解釈の問題なのである。そして、否定説にみえる誤伝または竄入説も、（今となってはこれを積極的に証明する資料がないのであるから否定にならないとする反論によって、肯定説をとることも無根拠である）結局は論争点を構成していないのであるから、右の歴史ないし歴史上の人物解釈の問題に帰着せざるを得ないのである。

以上の前提からして、端的に極論すれば、筆者は、結局この問題は、先に述べた孔子と隠者たちとの接触にみられるのと同じく、孔子なる人物に仮託された寓話であるとする。

何となれば、すでに述べてきたように、これらの事件に関する『論語』の記述はすべて「上論」を中心とする一般的な『論語』記述と体裁を異にして、かなり説明的であり、また、公山不狃に招かれたことも、陽虎（貨）との問答も、すべて孔子の積極的な治國平天下の姿勢ないし心術を標榜しているからである。七十二君に見えて、ついに自己の礼楽重視による治國策が容れられなかった、いわば万年野党の党首的存在であった孔子のそれにもかかわらず、終生「この人の徒とともにせずんば、誰ともにかせん」といった一種氣迫のようなものが描き出されているとみるべきであろう。

これをさらに、当時の歴史的状況下で考えてみれば、すでに明らかにした『左伝』に記録されていた趙簡子と史墨のやりとり（昭公が外地で薨じたとき、魯国の人士はあげて誰もこれを異としなかったので趙簡子が史墨に尋ねたところ、史墨は、魯公よりも直接為政の座にある季氏の方が、よほど代々民生の安定に尽くしてきている、という意味のことをいって、むしろこれを当然のこととした）からしてもわかる通り、一國の安定、民生の安寧は、歴史的・伝統的な名目のみで治國平天下の実力をすでに失っている周室中心の政治に拘泥するよりも、現実、力のあるものによって為されるべきである、とする一般的エーストを反映していたと考えれば、孔子が小さな食邑である「費」に根拠をおいて東周を恢復させようとはかった——という話は、それが寓話的であればあるほど、かえって説得力のあるものともなり得るのである。しかも、周室に対してならばいざ知らず、たかだか魯國の陪臣である季氏にそむいて立とうとした公山不狃であつてみれば、單純に謀叛の徒ときめつけるわけにはいかず、したがって、孔子も謀叛の徒にくみした品性下等なる人物とするわけにはいかないのである。

くり返していえば、風刺冷笑のなかでも、毅然としてみずからの信ずる一貫の道を歩んだ孔子、謀叛の徒とされた人物たちにさえもくみしてまで、周室封建制恢復を希求した孔子なる人格ないしその姿勢が寓意をもって記述されている——と解すれば、歴史的事実の存否は別として、歴史解釈論としては可能でもあつたらう、ということである。

しかし、それにしても、季氏の八佾の舞を舞うをみて傷歎おくあたわざるものがあつた孔子にとって、たとえ上に述べたような公山不狃や陽虎との対応関係があつたにしても、出仕できるすじ合ひのものではなかった——というのが、一般的な孔子の人物論の前提におかれてしかるべきであろう。筆者が、これを孔子の人物と歴史的状況に仮託した寓話だとせざるを得なかった所以のものもまたここにある。子遷も「……如し我を用うれば、それ東周を為さんと。然もまた卒に行かざりき。」とこの文脈を結んでいるのは、筆者のいうような意味における論述だと解す

れば理解ができるように思われる。

五、魯国出仕と孔子の政策

「陽虎はこれに由りて益々季氏を軽んず。季氏また公室に僭し、陪臣国政を執る。これをもって、魯は大夫より以下、皆僭して正道より離れたり。故に孔子は仕えず、退いて詩書礼楽を修む。……」（『孔子世家』）と子遷が述べた状況が魯国に起こって（このとき定公五年）から数年後、すなわち定公の九年、孔子は年五十一にして、定公に用いられて中都の宰（魯の邑、今の山東省あたりの長官）となり、さらに司空（内務長官）から大司寇（司法長官）になったという。つまり、退いていた孔子が就職（筆者の考察によれば、すでに論究した如く、再就職といつてよい）したのである。

この就職がいかなる事情で実現したかは、資料がないからわからないが、事実関係としては、『左伝』定公九年に次のような記録があるから、一応魯国に出仕したことについての拠りどころはあることになる。すなわち『左伝』によれば、この年、すでに述べたように、陽虎の奪権闘争が一敗地にまみれて、彼は斉に逃れた。彼は斉へ逃げたのち、兵力を斉侯から借りて、魯を伐ちたいと願い出た。斉侯は「三たび兵を加えれば、必ずや魯国は取れます。」という陽虎の口車に乗って、魯国への出兵を許そうとしたが、鮑文子（はうぶんし）はこれを諫止した。彼は、「陽虎という人物は、かつて季氏の寵を受けていたのに、季孫を殺して魯国を不利に導こうとしました。その上さらに、自分の要求を容れるようわが国に求めています。自分の利益になることには親しんで、仁君には親しもうとしません。どうしてこのような人物を用いることができましょう。わが君は季氏よりも富をもち、しかもわが国は魯国よりも強大です。陽虎はこれをねらってわが国を傾覆させようとしているのです。魯国はようやくその疾患を免れたというのに、またなんでわが君はこれを用いて要求を容れようとなさるのですか。」といった。そこで斉侯は、陽虎をつかまえて閉じ込めたが、彼は奸計を用いて逃れ、宋へ行き、ついには晋へ逃れて趙氏に身を寄せた。このとき魯国にいた孔子は「趙氏はこれから代々乱れることだろう。」といった、という。このような記事が『左伝』に見えるところから、定公の九年には、孔子は魯侯に出仕していたであろうと推定されるのである。

ところで、『世家』や『左伝』の記事を中心としてわかるように、この頃孔子が魯国の政治にたずさわっていたことは推定されているが、そ

れの影響、とくに他国への影響等については、今まであまり注目されていないので、孔子という人物が政界にデビューすることによって、どんな反響が起ったか、『左伝』『世家』によりながら述べておこう。それが結局、かの「鬱結して通路を得ない」孔子を描くことになるからである。

『左伝』『世家』によれば、孔子が出仕して最初にたずさわった事件は、斉と魯が和睦を結んだときのことである。すなわち、定公の十年（前五〇〇）齊・魯は夾谷^{きょうこく}に会盟することになった。子遷はこれについて、「定公の十年春、斉と平ぐ。夏、斉の大夫黎鉏^{れいそ}は、（景）公に言って曰く、魯は孔丘を用う、その勢は斉を危くせんと。乃ち使をして、魯に好会を為して夾谷に会せんと告げしむ。」と述べている。つまり、斉の大夫黎鉏が、「魯国では孔丘を用いて政治を行なうことになったようですが、これは大変警戒すべき事柄で、やがてその政治的強大さはわが国をおびやかすことになりましょう。今のうちに魯国と平和（不可侵）条約を結んでおくに越したことはありません。」と斉の景公に上言したというのである。この記事は『左伝』にはみえないし、ほかの資料にも出ていないから、おそらく子遷のつけ加えた文であろう。

* 『公羊』『穀梁』は「頬谷」に作っている。現在の山東省萊蕪県にある夾谷峪と同じ場所とみられている。

しかも「孔子世家」では、孔子が魯国に用いられたことを知って、その勢は斉を危うくするであろうと、むしろ怖れられていたと伝えているのに、『左伝』の定公十年の条では、「夾谷の会」のとき、犂弥^{りみ}という家臣が斉公に対して「孔丘は礼を知るも勇なし。もし萊人^{らいじん}をして兵をもつて魯侯を刳^く（おびやかす）せしむれば、必ず志を得ん。」と上言しているところをみれば、魯国における孔子登用には二通りの評価がなされていたようである。しかし、ひるがえって、右の二つの記録からしても考えられるように、相反する評価が下されるほど、やはり孔子の政路への登場は、近隣諸国に反響を呼び起こしたことは否めない事実であったと解すべきであろう。

ところで、この「夾谷の会」において、魯公を相け、事を執り行なう任にあてられたのが孔子であった。「世家」『左伝』の録するところによると、孔子の活躍は水際立った鮮かさを示している。すなわち、まず「世家」では、次のように記されている。魯の定公が出發するとき、公は平時の乗車によろうとしたが、孔子は斉国の内情を察し、かつ国君が境域を出て外国に行くときの古来のしきたりに則り平時の乗車のみで行くことを定公に諫めた。孔子は「文事ある者は必ず武備あり、武事ある者は必ず文備あり」との古来の伝えを引いて、定公の出国には必ず文武両官を左右に従えるべきことを説いた。定公はこれを諾として左右の司馬（武官）を従えて斉公に会した。その会場には土階三等（土の階段を三

段つけた質素なもの」を設けてあり、両公はここで会遇の礼を交してやがて壇上にのぼり、献酬の礼を終えた。このとき齊の役人が走り寄って「請う、四方の樂を奏せん」というと、齊の景公がこれを諾としたところ、大旗、羽飾、長槍、二股の長槍、劍、長い盾などを手にした夷人の一団が入場して乱暴な太鼓をたたいて躍り出した。

それは『左伝』に伝える犂弥のそののかし（前出）の通りのことを、齊公はやらせたのであって、明らかに武力による威嚇である。今こそ孔子が左右の司馬を定公に従わしめた甲斐があった。孔子は、たぶんわが方の武力を背景として事を処したであらう。かかる光景が現出するや、『左伝』によると）孔子は、ただちに定公を守ってその場を退出し、次のように抗議をした。すなわち、

兵をもって直ちに萊人を撃ってほしい。いま両君が和親の議を結ぼうとしているのに、裔夷（遠隔の地からきたえびす）の俘虜が武力でこれを混乱させた。これは齊君が諸侯に対して模範となる威令を行なう所以ではない。そもそも辺縁の異国が夏（中華の意味）の国のことをあれこれと謀らず（萊のような）東夷が中国の為すことを乱さず、俘虜が盟約の場になど出て来ず、武力を和親の場に近づけないのが本来のありかたである。しかるにこのような事を為すのは、神威に対しては不祥であり、徳においては義にもとり、人の仕業としては礼を失するものである。齊君がかかることをなさるはずはない。

というのである。ここに至って、孔子がこの「好会」を主催するにあたり、一方で武備を忘れず、他方において事理をわきまえ、齊君に相對せしめた周到さをわれわれはつぶさに知ることができるのである。

さて、孔子の抗議を受けた齊公は萊人の一団を去らしめ、盟を結ぶ段になると、犠牲の上に盟約文をのせて運ばせた。そこには「齊の軍が国境を出るときに、甲車三百乗をもって我に従わない者があれば、盟約違反の禍を被ることがあらう。」と記してあった。孔子は茲無還に命じ齊の人に会釈して対えさせた。「魯国から奪い取った汶陽ぶんやうの田を返さないのに、わが方だけがその盟約に従えというならば、同じく違反の罰を被るであらう。」と。この盟約は一方的に従うわけにはいかない、もし齊の要求を容れるとすれば、魯国から奪った汶陽の田を返還してからのことだ——といって拒否したのである。

齊公はそこで魯公に対する招宴を催そうとしたが、孔子は齊国の梁丘りょうきゅう抛ななる者に、

齊・魯の間にとり交わされてきた旧典（古いしきたり）をあなたは知らないのですか。会合はすでに成ったのに、また招宴を受けるのは

事を行なう者をわずらわすだけです。かつ、犧象（牛や象の形の酒器で尊重すべきもの）は門外不出のもの、また宮廷内で奏すべき嘉樂（雅樂）を野に出て行なうは祭祀の大礼に背くものです。饗宴にすべてが具われば、これは棄礼（礼の本義を忘れたむだごと）となり、具わらなければ秕稗の穀物に似て非なるが如くごまかしとなります。礼が具わらなければ齊公は辱を受けるでしょうし、むだな棄礼を行なえばまた齊公の名を汚しましょう。このところをなぜ考えませぬか。そもそも招宴は（齊公の）徳を昭かにする所以であって、それが昭かにされないのでは、取り止めるに越したことはありません。

と申し述べた。齊公はこれを聞いて招宴を取りやめた。やがて齊人が来て、鄆・韞・龜陰の田を返還した。これが『左伝』定公十年の条の伝えるところである*。

* この間の事情を「世家」には次のように記されている。萊人の一団が乱入したとき孔子は趨り進んで、土偕をのぼり、一等を尽くさず（最後の一段は残して）袂をあげていった。「吾が両君好会を為すに夷狄の衆を何ぞ此に為さん、請う有司に命ぜん」と。齊の役人共は孔子をしりぞけようとしたが、孔子は去らず、左右の席にいた晏子と景公をみつめていた。景公は大いにこれをはじ、指揮して萊人の一団を去らしめた。しばらくして、齊の役人は趨り進んで「請う宮中の衆を奏せん」と申し出たところ、景公がこれを諾としたので、優倡（俳優）や侏儒（小人）の一団がたがいに戯れながら進み出てきた。それをみた孔子は、趨り進んで土偕を登り、一等を尽くさずして「匹夫にして諸侯を笑惑する者は、罪誅に当たる。請う有司に命ぜん」と申し述べた。そこで齊の役人は彼らに刑を加えその手足を切りはなした。景公は孔子の言動に懼れをなして、大いに動遙し、孔子の義（すじ道）を通すところにはかなわないとさとした。帰国してからも大いに恐れ、群臣に告げて「魯国では君子の道をもつてその君を輔佐しているのに、諸子は夷狄の道をもつてわたしに教え、そのあけくわたしが罪を魯君に得るようにした。いったいどうしたらよいのか。」といった。役人は進み出て「君子に過ちがあればこれを謝するには実質をもつてしますが、小人は過ちがあると謝するに質なき文飾をもつてします。君がもし心痛されるところがありますならば、謝するに実をもつてなさるのがよろしいと思います。」と対えた。そこで齊公はかつて侵略した魯国の鄆・汶陽・龜陰の田を返してその過ちを謝した。——これが「孔子世家」の伝えるところであるが、『左伝』および他の春秋二伝のうち『穀梁伝』に録する記事がもつともこれに近いので、司馬遷はこれにもとづいて、さらに大いに潤飾したものと思われる。

右の注によってもわかるように、この「夾谷の会」の経過およびその時の模様は三伝、とくに『左伝』と「世家」によって違っているが、いずれも定公に従って会盟を主催した孔子の臨機応変の措置によって、魯公が無事であったばかりでなく、事の義理を齊公の前に披瀝することによって、かつて齊に奪われていた鄆・汶陽・龜陰の三田を返還せしめたのであるから、その外交上の功績はきわめて大であったといえよう。ちなみに、当時の魯国をめぐる政治外交上の状況を考えてみるに、右の事件は、まさに魯国にとって、危機一髪の間にあったのである。すなわち、

前七七〇年、周王朝が陝西の西安を棄てて東へ下り、河南の洛陽に遷都し、西周時代から東周時代へ移っておよそ半世紀、やがて周室封建制が弛緩し、春秋時代になる。いうまでもなく春秋五霸のうちもっともその覇業を成し遂げたのは、斉の桓公（東周の莊王の六八五年から襄王の六六四年のころ）と、晋の文公（襄王の六三六年から同じく六二八年のころ）とであった。以後晋の勢力は久しく続き、前六世紀の半ばにはすでに孔子の父叔梁紇は武將として活躍していた。やがて孔子の時代に及んで、晋も漸く国力が衰え、また久しくこれと争っていた楚も衰頹し、これに替って南方揚子江下流地域の呉と越とがその力を挙げていた。ところが、もともと斉は桓公のときにその覇業を成し遂げた大国であったから、天下、ことに華北地域において勢力を張っていた晋の衰微に乗じて、再び自国の力を東方に向って伸ばそうとしていた。『左伝』定公の七年の条によれば、この年の秋斉の景公は、鄭伯と鹹において盟約し、さらに晋に叛こうとしていた衛侯と沙（または瑣）で盟約し、ここに斉は公然と晋に対抗する同盟勢力を形成した。晋は斉・衛・鄭の三国に交戦を挑んだが成功せず、その国力の衰頹を天下に露呈するに至った。

ところで、魯国は元来晋を盟主として宜みを通じていたから、右の三国と魯との関係は悪化せざるを得ない。いま、『左伝』によれば、まず定公七年に斉の国夏が魯に攻め込んだとき、陽虎が季桓子の御となり、公斂処父が孟懿子（仲孫何忌）の御となり、斉の軍に夜討をかけようとしたが、斉の軍はこれを知って車の隊列を解き、兵を伏せて待ち受けていたので、処父や季氏の陪臣苦夷の非難もあって、陽虎は斉軍に突入することを断念し、引き返した、魯はそのために敗れずにすんだ——という事件があった。また、定公八年の春、魯公はみずから命を下して斉を侵略させ、陽州の門を攻めたが、兵士の意気あがらず、結局退却してしまった。

魯国は二大強国であった晋・斉の間にあって、外交上のとるべき路線がきわめて微妙で困難な状況におかれていたのである。三桓氏による専断の内政と相俟って、当時の魯は新しい活路を見出すための、孔子による内外政策の一大転換ないし改革を期待していた。孔子は事実、晋との長い盟主的隷従関係を断ち切り、三桓氏の武断専横を根絶する挙に出たのだが、これは失敗に終り、魯国を去らざるを得ない破目に陥った。孔子の改革運動と、理想的徳治国家の実現はここに夢と消え、ついに流浪の旅に出ることになったのである。（未完）

〔紙数の都合上、以下の稿は別誌に掲載することにした。〕